

〈幼児教育〉

自ら環境にかかわっていく幼児の育成

—五感を通して体験することのできる環境構成の工夫—

宜野湾市立大山幼稚園教諭 鈴木 涼子

I テーマ設定の理由

近年、子どもを取り巻く環境は著しく変化している。都市化による自然環境の減少、情報化におけるテレビゲームやインターネット、携帯電話等のバーチャル体験の増加などにより、子どもたちの遊びにおいて直接体験が減少していると考えられる。

幼稚園教育要領第1章総則第1幼稚園教育の基本において「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」と明示されており、また、幼児期の発達については、安定した情緒の下で興味や欲求に基づいた直接的・具体的体験を通して、心身が相互に関連しあって成し遂げられていくことが重要と示されている。さらに、「環境」の領域では、「幼児の周囲には、園内や園外に様々なものがある。幼児はこれらの環境に好奇心や探究心をもって主体的にかかわり、自分の生活や遊びに取り入れていくことを通して発達していく」と述べられており、そのために「教師は、幼児が環境にかかわり、豊かな体験ができるよう、意図的、計画的に環境を構成することが大切である」と記されている。

本市においては、「根づくり教育」が主要施策として策定され、そのなかの「学び」の育成では「自ら学ぶ意欲と基礎・基本および思考力、判断力、表現力の育成による学力向上をめざす。」とある。それを踏まえ、幼稚園教育においては、幼児が主体的、積極的に生活を進めていこうとする意欲を育む必要性が示されている。また、環境構成においては「自ら環境とかかわりながら直接体験や感動体験を豊かにしていけるような環境の構成を工夫すること」が努力事項に挙げられている。

これらのことから、幼児が園生活の中で情緒を安定させ、多様な活動の中で直接的・具体的体験を重ねることは、幼児の心身の健康な発達を促し、自ら環境へかかわろうとする興味や関心、好奇心を培うこととなり、今後の小・中学校での学習意欲や長い人生における「生きる力」へつながっていくと考える。

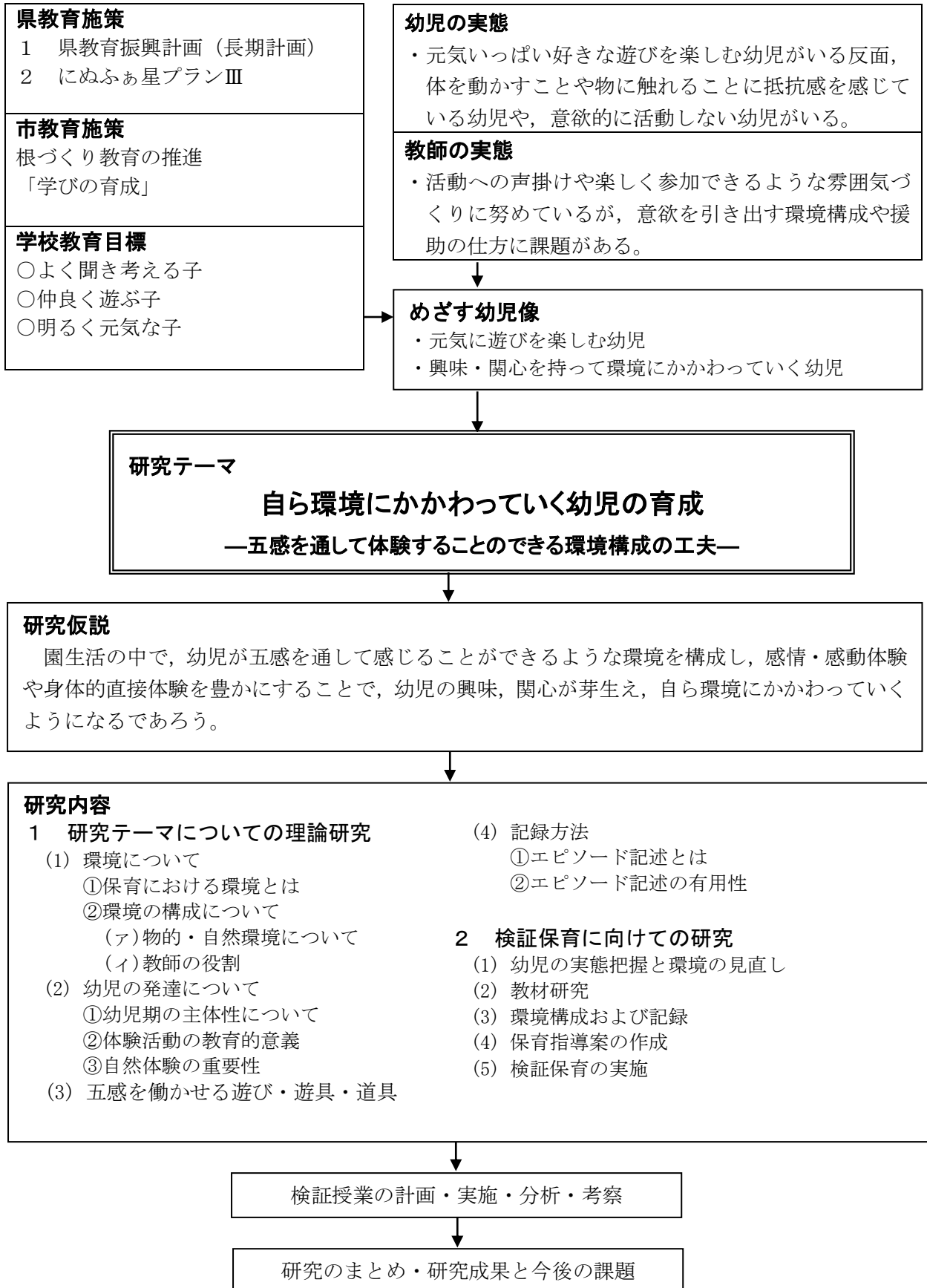
そんな中、園の子どもたちの遊びの様子を見ると、汗をかくことや水に濡れること、砂の感触、虫との触れ合い等を好まず室内で過ごす割合が多い幼児や、「疲れた」「めんどくさい」といって意欲的に活動に取り組まない幼児が見受けられる。「どうせ負けるから嫌だ」と最初から挑戦する気持ちすら持たない幼児もいる。そこには、物に触れることや体を動かすことを不快に感じる様子や、物事への抵抗感を抱いている姿が伺える。

そこで本研究では、園生活の中で幼児が五感を通して感じるような環境を構成し、幼児の感情・感動体験や身体的直接体験を豊かにすることで、興味、関心を持って自ら環境にかかわっていく幼児を育成したいと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

園生活の中で、幼児が五感を通して感じるような環境を構成し、感情・感動体験や身体的直接体験を豊かにすることで、興味、関心が芽生え、自ら環境にかかわっていくようになるであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 環境について

(1) 保育における環境とは

保育における「環境」とは、「子どもの育ちを引き出すような、意味ある環境としての『人・物・こと』とそれを組織していく時間・空間」であると秋田喜代美（2001）は述べている。

本研究の主題における「環境」は、本来「人・物・こと」を指すが、ここでは幼稚園教育要領における領域「環境」のねらいに沿って研究をすすめるため、「物」（物的環境）と自然事象に焦点をあてて、幼児の環境とのかかわりを考えていきたい。

以下は、『保育用語辞典第5版』（森上史郎他 2000）および『幼稚園教育要領解説』（2008）（以下、『要領解説』と略す。）の「環境」の領域を参考に保育環境について整理したものである（表1）。

表1 保育における環境

	区分	種類	具体的要素	時空間的要素
保育環境	人	人的環境	友だち、保育者、家族、地域社会の人々など	時間・空間・雰囲気・関係・価値観
	物	物的環境	自然物（身近な植物、身近な生き物、土、砂、石、水、風など）、遊具、玩具、紙、廃品、施設、設備など	
	こと	自然事象	園の地理的背景、季節、天気、気候など	
		社会事象	地域、園、小学校における行事、季節の行事、クラス活動など	

(2) 環境の構成について

『要領解説』において、幼児期の発達を促すものとして、能動性が十分に発揮されるような対象や時間、場の設定、様々なものとかがわることができる環境構成、そして、幼児の行動や心の動きを受け止め、認めたり、励ましたりする教師などの大人の存在の必要性が述べられている。また、「環境」の領域においては、自然に触れて遊ぶ中で得られる感動体験の重要性や様々な物に直接触れることで、考えたり、試したり、探究していく態度が育つことが記されている。

これらを踏まえると、幼児の発達を促すためには「多様な体験ができる豊かで魅力的な環境の構成」と「幼児の気持ちに寄り添い、一人一人の発達に沿った援助のできる教師の存在」が必要であると考える。そこで、環境を構成する際に必要な条件やポイントを以下のようにまとめた（図1）。

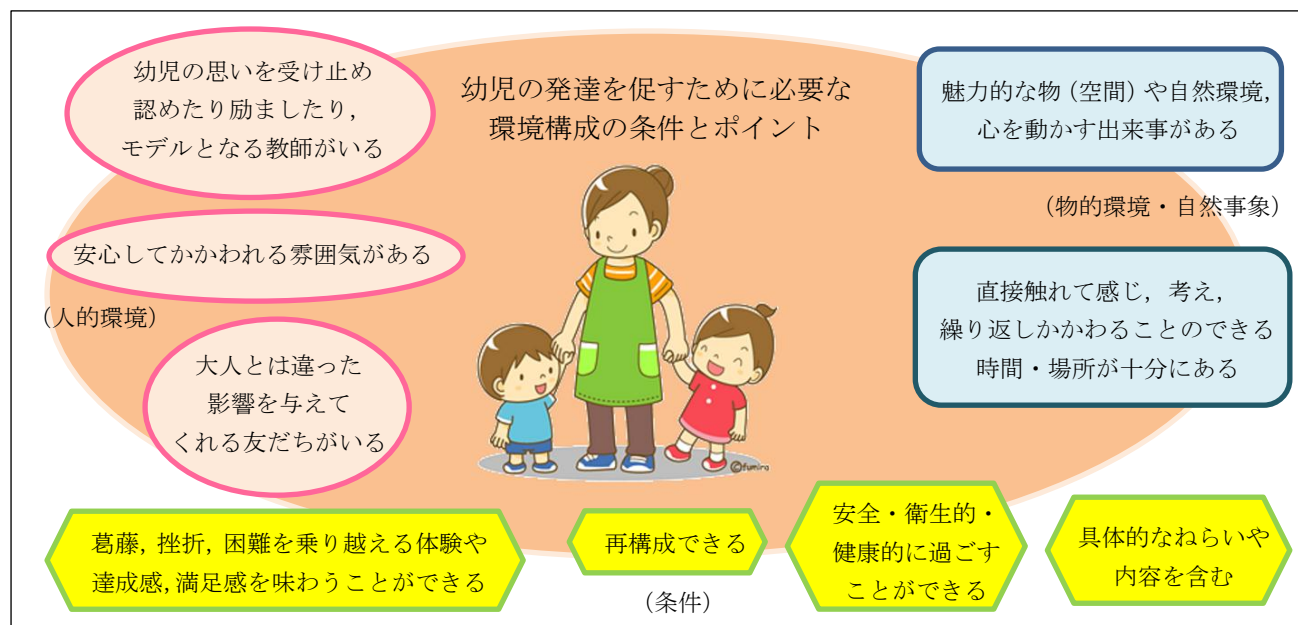


図1 幼児の発達を促す環境構成の条件とポイント

① 豊かで魅力的な物的環境・自然環境とは

幼稚園教育要領の「環境」の領域に焦点をあてた環境構成について、より具体的に考える。「環境」の領域ではねらいが「(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2)身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」となっている。このねらいを達成するための魅力的な物的環境および自然環境について『最新保育講座9保育内容「環境」』（柴崎正行他 2009）、『きのうのつづき「環境」にかける保育の日々』（あんず幼稚園編 2012）では、以下のことが重要視されている（表2、表3）。

表2 物的環境・自然環境の構成のポイント（柴崎正行他）

- | |
|---|
| ア 保育環境が乏しければ発達しないが、不足の環境も必要であり、十分に数がそろっていない環境の方が、順番や交代で使うことの必要性を考えさせることにつながる。 |
| イ 道具がいつでも取り出せ、自由に使える。 |
| ウ 物が豊富で、自由度が高いと生活全体が乱れていくことも考えられる。どんな物をどの程度用意し、どの程度で自由にさせるのかは、園での遊びに対する考え次第である。 |
| エ 乗り越えられそうな困難を体験できるようにすることも、環境として重要である。 |

表3 物的環境・自然環境の構成のポイント（あんず幼稚園）

- | |
|--|
| ア 子どもは、隅っこや穴のような場所が本能的に落ち着く。あまり整理整頓をせず、自分たちで空間がつかれるような素材や隙間をあらかじめ用意しておく。 |
| イ 遊びの素材になるような草や草花を生やす。 |
| ウ 小動物を飼育し、命の営みを共有する。 |
| エ 幼児が新鮮な出会いを体験できる標識や文字の環境をつくる。 |
| オ 地域の公共施設を利用する。 |
| カ 幼稚園内外の自然や地域社会の人々の生活に日常的に触れ合う機会をつくる。 |

これらのことから、幼児がいつでも使えるような道具・素材が用意されていることや、自分たちでつくることができる可変的な空間があること、幼児が乗り越えられそうな課題を含んでいること、園庭の自然環境が整っていること、他の命に触れ合う機会となる生き物を飼育していること、園外環境の活用が工夫されていること、といった要素を含んだ環境が、豊かで魅力的な物的環境・自然環境と捉える。また、物の数量や使用法の自由度については、幼児の発達の程度や興味・関心に基づいて職員間で話し合い、状況に応じて加減する必要がある。標識や文字については、園内外において日常的に物や人の名称を表示するなどして、幼児が普段の生活の中で気付いたり発見したりできるような環境構成に取り組む。

② 教師の役割

幼児と環境とのかかわりには教師の援助が大きく影響する。ここでは、幼児と環境とのかかわりを豊かにするためには、どのような教師の援助が必要となるのかを考えたい。

『要領解説』では「教師の動きや態度は幼児の安心感の源である」ことや「モデルとして物的環境へのかかわりを示すことで、充実した環境とのかかわりが生まれてくる」と述べられ、教師が幼児の行動に温かい関心を寄せる、心の動きに応答する、共に考えるなどの基本的な姿勢で保育に臨み、幼児がどのような興味や関心を抱き、どのようにかかわろうとしているのかを理解することの重要性が示されている。また、あんず幼稚園の教師は「ものと子どもとの関係だけでは、その子どもにとって意味をもたないものもある。ところがそうしたものも、保育者が一緒に遊ぶ中で魅力的なものに感じられるようになっていく」、「保育者が自ら楽しく遊ぶ、(略)遊びの重要性を折に触れて保護者にも伝え、理解を得ていくなどの多面的なアプローチが必要になる場合もある」と述べている。

そこで、幼児と環境とのかかわりを豊かにするためには、物的・自然的環境を整えるだけではなく、教師がモデルとなって環境へのかかわりを示し、幼児と一緒に自ら遊びを楽しんだ

り、幼児の行動に温かい関心を寄せ、心の動きに応答したり共に考えたりして、幼児の環境への興味・関心を高める援助が必要と考える。また、幼児が何に興味・関心を抱いているのか、どのように環境とかかわっているのかをその都度理解するように努め、時に応じて遊びの重要性を保護者へ知らせていく援助をしていきたい。

2 幼児の発達について

(1) 幼児期の主体性について

幼児期における環境とのかかわりについて、『要領解説』の中で以下のように述べられている(表4)。

表4 幼児期における環境とのかかわり方

<p>① それぞれの興味や関心に応じ、直接的・具体的な体験などを通じて幼児なりのやり方で学んでいく。</p> <p>② ものに対する興味や関心は、他の幼児や教師などと感動を共有したり、共にその対象にかかわって活動を展開したりすることによって広げられ、高められていく。また、その対象と十分にかかわり合い、好奇心や探究心を満足させながら、自分でよく見たり、取り扱ったりすることにより、さらに高まり、思考力の基礎を培っていく。</p> <p>③ 驚いたり、不思議に思ったり、嬉しくなったり、怒ったり、悲しくなったり、楽しくなったり、面白いと思ったり、といった情動や心情を伴う体験は、幼児が環境に心を引き付けられ、そのかかわりに没頭することにより得られる。そして、そのような体験は幼児の心に染み込み、幼児を内発的に動機付ける。そして、新たな興味や関心がわいてくる。</p>
--

以上のことから、幼児期は興味・関心に基づいた具体的・直接的体験を通して環境と十分にかかわることで発達が遂げられ、友だちや教師のかかわりや情動・心情を伴う体験が、幼児の興味・関心をさらに高めるといえる。そして、高まった興味・関心が幼児を内発的に動機付け、新たな環境に自らかかわっていく力を生み出すと考える。

(2) 直接体験について

表5 体験活動で得られる効果(文部科学省)

① 体験活動の教育的意義

文部科学省は「体験活動事例集—体験のススメ[平成17,18年度豊かな体験活動推進事業より]」の中で、『体験活動』とは、文字どおり、自分の身体を通して実地に経験する活動のことである。人は、いろいろな感覚器官を通して、外界の事物・事象に働きかけ、学んでいく。具体的

<p>①現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上</p> <p>②問題発見や問題解決能力の育成</p> <p>③思考や理解の基盤づくり</p> <p>④教科等の「知」の総合化と実践化</p> <p>⑤自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得</p> <p>⑥社会性や共に生きる力の育成</p> <p>⑦豊かな人間性や価値観の形成</p> <p>⑧基礎的な体力や心身の健康の保持増進</p>
--

には、見る(視覚)、聞く(聴覚)、味わう(味覚)、嗅ぐ(嗅覚)、触れる(触覚)といったいろいろな感覚を働かせて、あるいは組み合わせ、外界の事物や事象に働きかけ、学んでいく」と述べ、その教育的意義について「豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧としての役割が期待されている。つまり、思考や実践の出発点あるいは基盤として、あるいは、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくために体験が必要である」とし、その効果を示している(表5)。また、子どもの学びの過程を大きくまとめて示すと、「感覚(体験)→思考(概念化、知性)→実践(行動、自己実現)」と捉えられるとしている。具体的には、まず、感覚的に外界の事物・事象をとらえ、「なぜ、どうして」と考えることを通して概念化を図り知性を育て、そこで学んだ「知」を再度、実生活と結びつけ実践化し、体験と概念とをキャッチボールしながら(統合的思考)、さらに思考を深め新しい認識の枠組を獲得していくと説明されている。さらに、「体験が子どもの生活の中で十分でない、子どもの学びの過程は、思考・概念の段階からいきなりはじまることになる。実際のものにふれることなく、抽象化され、概念化された理屈をただ覚えこむほか、学ぶ手立てを失っていく。知ることの喜び・

意欲も失われていく」と述べ、学びの基礎としての「体験」を重要視している。また、『要領解説』の中では、「幼児が心身ともに調和のとれた発達をするためには、幼稚園生活を通して、発達の様々な側面にかかわる多様な体験を重ねること」の必要性が記されており、「多様な体験」とは、単に様々な活動を幼児へ提供することではなく、自分で考え、判断し、納得し、行動することを通して内面の成長につながっていくこととし、「活動の豊かさ」とは、活動の過程で幼児自身がどれだけ遊び、充実感や満足感を得ているかが重要であるとしている。

以上を踏まえると、「感覚(五感)を通した体験」が学びの出発点であると捉えられる。直接「物」とかかわり、感覚(五感)を通して「物」を知り、その概念を獲得することが学びの土台となり、幼児の思考の深まりに繋がると考える。そういった意味において、幼稚園で幼児が五感を通した直接体験を豊かに経験することは、大変重要な意義をもつと考える。幼児の直接体験を十分に保障するために、環境構成や活動の在り方を見直し、工夫していきたい。

② 自然体験の重要性

『要領解説』の中で「自然との出会いを通して、幼児の心は安定し、安らぎを取り戻せる。そして、落ち着いた気持ちの中から、自然に繰り返し直接かかわることによって自然への不思議さや自然と交わる喜びの感情がわき上がるだろう。(略)このような自然との出会いは、豊かな感情や好奇心をはぐくみ、思考力や表現力の基礎を形成する重要な役割をもっている」と記されている。また、秋田喜代美は『幼稚園じほう』(2008 第 36 巻第 6 号)の中で、子どもにとっての自然の豊かさを「子どもとその自然がどのように出会い、触れ合う機会をもち、いかなる経験がそこでできるか」と述べ、出会いの経験を保証する必要性を訴えている。さらに「自然を感じる時間的なゆとりや心理的な余地が失われつつ」あることや、「幼児期にふさわしい園生活を保障するために求められるのは、この出会いを支える姿であり、心理的な時間と空間」であること、「保育者自身がまず、そのような出会いの経験に心動かされ、かかわり探究し、その思いが子どもにも伝わっていくことが自然との出会いでは重要」と述べ、幼児の豊かな自然体験を支える際に必要な教師の援助の在り方を示している。

これらのことから、幼児の情緒の安定が、教師との信頼関係の構築によってもたらされることはもとより、自然との出会いを通して成し遂げられることを無視することはできない。教師が見守る安心感の中で自然とかかわることによって、さらに幼児の情緒は安定し、豊かな感情がはぐくまれ、興味・関心、好奇心が芽生え、新たな物や事象にかかわっていくといえる。自然との出会いを保障するためには、園庭の自然環境を整えたり、園外の自然に触れる機会をつくるなどして、幼児が豊かに自然と出会える機会が得られるように工夫する必要があるが、物的環境を整えるだけでなく「今ある」自然に気付く・感じる感性を持つことも重要である。幼児の感性には教師のそれが大きく影響していることを踏まえ、「教師自身が心動かされる経験をする事」、「かかわり探究する姿を示すこと」、「思いが幼児に伝わっていくこと」の3点を成し遂げられるような援助の工夫を図っていく。

保育実践では、自然物を取り入れて遊ぶ工夫を示したり、自然事象に気付かせる言葉かけをするなどして意図的な援助をするとともに、教師自身が自然との出会いを楽しみながら、幼児や他の教師の感性にも心に向け、「幼児とともに感じる」ことを大切にしながら、幼児の自然とのかかわりを豊かにし、興味・関心へ繋げていきたい。

3 五感を働かせる遊び・素材・遊具・道具

幼児の実態と生活の流れを考慮し、素材・遊具・道具を様々な形で組み合わせて、五感に働きかける環境構成や遊びの設定を行う。遊びの中で五感への刺激となるような素材・遊具・道具の例を、以下の表にまとめた(表6)。

表6 五感を働かせる遊び・遊具・道具

身体の働き	感覚刺激 感じ方	○遊びの種類 □環境構成		保育で活用できる素材・遊具・道具 (◎は物, ☆は自然物)
		物的環境	自然環境・事象	
視覚 (見る)	光・色・形 綺麗・汚い 美しい 明るい・暗い 眩しい 遠い・近い 濃い・薄い 速い・遅い 高い・低い 多い・少ない 大きい・小さい など	○絵本, 紙芝居を見る ○シャボン玉遊び ○絵の具を使って色水遊び ○色染め ○製作 ○科学遊び ○料理, おやつ作り □壁面飾り □揺れる飾り(モビール等) □鏡 □砂時計 □写真, 絵, 地図, 文字, 標識の掲示	○動植物の観察 ○自然物(石や砂など)の色や形の観察 ○雲の形, 空の色, 風の動きなどの観察 ○紙飛行機 ○凧揚げ ○花などを使って色水遊び ○自然物を使った色染め(草木, コーヒー, 玉ねぎ染めなど)	◎画材道具(絵の具, クレヨン, クーピー, ペンなど) ◎写真, 絵 ◎虫眼鏡 ◎万華鏡 ◎色彩豊かなもの(積み木, ブロック, 折り紙, ビーズ, スパンコール, ビー玉, おはじき, 毛糸など) ◎鏡 ◎地球儀 ◎地図 ☆植物(花, 木, 草, 葉, 種など) ☆自然物(石, 水, 土, 砂など) ☆自然事象(雲, 虹, 風など) ☆飼育動物・虫(蝶, ザリガニ, 魚, ウサギなど)
聴覚 (聞く)	音 高い 低い 大きい 小さい など	○楽器遊び ○音楽鑑賞 ○物がぶつかり合う音を聴く ○楽器作り □鈴, 風鈴 □メトロノーム □音の出る絵本	○自然の音 ○草笛, 葉笛で遊ぶ ○自然物を使って楽器作り ○動物や虫の鳴き声を聴く	◎楽器(打楽器, オルガンなど) ☆飼育動物・虫 ☆自然事象(雨・風) ☆自然物(砂・石・水)など
嗅覚 (嗅ぐ)	におい 良い匂い 臭い 甘い 酸っぱい など	○ハーブティーを味わう ○おやつ作り(ムーチャーやハーブを使ったお菓子など) ○石鹸遊び ○石鹸作り □花を生ける, 飾る	○動植物の世話, 観察 ○植物を取り入れて遊ぶ ○栽培, 収穫体験	◎石鹸 ◎食材(小麦粉, もち粉, シナモン, バニラエッセンスなど) ☆植物(花, 木, 草, 葉など) ☆自然事象(土, 雨など) ☆飼育動物, 虫
味覚 (味わう)	味 甘い・辛い 酸っぱい しょっぱい 苦い 渋い えぐい うま味 など	○料理, おやつ作り(カレー, ひらやーちーなど) ○バター, ヨーグルト作り	○木の実を食べる ○花の蜜を吸う ○収穫物を味わう	◎食材(小麦粉, もち粉, 野菜, 牛乳など) ☆野菜や果物の栽培物(ねぎ, じゃがいも, 人参, ピーマン, トマト, 豆, グアバ, シークワーサー, アセロラなど) ☆木の実, ハーブ, 花など(くわ, やまもも, ミント, レモングラス, サルビアなど)
触覚 (触れる・触れられる)	感触・触圧 痛み・温度 ぬるぬる べたべた ねばねば ざらざら ちくちく つるつる ふわふわ ごつごつ さらさら 熱い 温かい 冷たい 痛い くすぐったい など	○粘土遊び ○製作遊び ○科学遊び(スライム作りなど) ○絵画 ○紙作り ○フィンガー・ボディペインティング ○ボール遊び ○運動遊び(縄跳び, 竹馬, フラフープ, ゴム跳びなど) ○ビー玉, おはじき遊び ○シャボン玉遊び ○料理, おやつ作り(ムーチャー, クッキー, 団子など)	○動植物に触れる ○栽培, 収穫体験 ○土, 泥, 砂遊び ○水遊び ○石鹸遊び ○木登り ○裸足で遊ぶ	◎製作に使える素材(紙, 布, 箱, 段ボール, 新聞, 廃材, ビニール, 紐, 毛糸, ゴム, 接着テープ, 糊, ボンドなど) ◎製作に使える道具(ホッチキス, カッター, 段ボールカッター, はさみ, キリなど) ◎積み木, ブロックなど ◎板 ◎粘土, 小麦粉粘土, スライムなど ◎固定遊具(ブランコ, すべり台, 鉄棒, 縄ばしご, 綱など) ◎石鹸 ◎運動遊具(縄, 竹馬, フラフープなど) ◎砂場道具, スコップ, バケツ, すりこぎなど ◎塩化ビニールパイプ ◎綱 ◎ビニールシート ◎風船 ☆自然物(砂・土・泥・水など) ☆植物(花, 木, 草, 葉など) ☆飼育動物・虫など

4 記録方法

本研究において、幼児の変容を捉えるために、ビデオでの記録とエピソード記述（鯨岡峻 2005）を用いる。

(1) エピソード記述について

① エピソード記述とは

エピソード記述とは、『保育用語辞典第5版』によると「ある特定の具体場面を、そこに関係する人物の行動やかかわりの展開に留意して、できるだけ詳しく記述したもの」であり、「現場のなかで立ち上がる問いについて、その問いとの関連のなかで、その現象の何らかの『意味』が見えてきたときに浮かび上がり、描き出されるもの」とされている。さらに「保育実践から立ち上がるさまざまな問題について、その本質に接近していくための質的研究の資源の一つとなるもの」である。

② エピソード記述の有用性

鯨岡は、「エピソード記述はエピソードの単なる記録とは違って、あくまでもその場面を体験した人がその体験を描くこと」であり、「そこには必ず『私は〇〇と思った』『私は〇〇と感じた』というような一人称の記述が入り」、「『客観的な記録』とは趣を異にし、と記している。また「書き手の心が揺さぶられたことが中心」となり、「心動かされる出来事（略）を描くことを通して、子ども一人一人の心の動きが分かり、自分の対応が自分に見えてきて、保育の振り返りに繋がる」と述べている。

このようなエピソード記述を用いて保育を描き出し、幼児の内面の変化を見取るとともに、自分自身の保育実践を客観的に振り返り、教師の援助の工夫に繋げていく。

5 幼児の実態把握と分析について

(1) 実態調査アンケート

① 調査目的 幼児の家庭での遊びの様子と、幼児の遊びに対する保護者の意識を調査し、研究実践へ役立てる。

② 調査対象 大山幼稚園そら組 29名の保護者 20名回収(回収率：69%) 記名なし

③ 調査日 平成 24 年 12 月 14 日

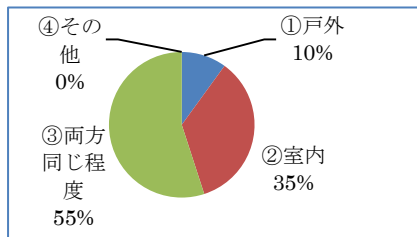


図2 戸外および室内で遊ぶ割合(入園前)

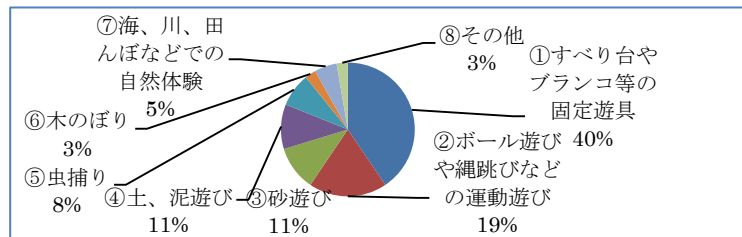


図3 戸外での遊びの種類(入園前)

入園前は、戸外と室内で遊ぶ割合が同程度か、室内で遊ぶ割合が多い。また、戸外遊びの種類においては固定遊具や運動遊びが過半数を占めている。これらのことから、十分に自然とかかわって遊んだ幼児は少ないと捉える。

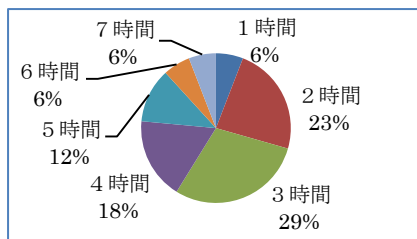


図4 休日の戸外での遊び時間(入園後)

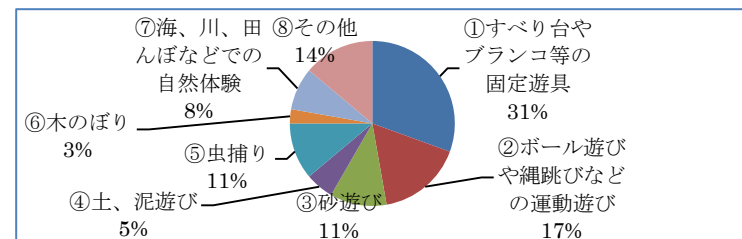


図5 戸外での遊びの種類(入園後)

また、入園後は、過半数の幼児が休日に戸外で2時間から4時間程度遊んでいるが、その内容は固定遊具遊びや運動遊びが多く、自然にかかわる遊びは少ないと捉える。

V 検証保育

検証保育指導案

平成 25 年 1 月 24 日 (木)

大山幼稚園 そら組

男児 16 名 女児 13 名 計 29 名

保育者 鈴木 涼子

外部講師 吉葉 研司

研修係長 森本 雅人

- 1 主な活動名 「月桃キャンドル」を作ってみよう。
- 2 ねらい ○身近な自然を活用し、工夫して生活に取り入れられることを知る。
○視覚、嗅覚、触覚で感じる。
○物質の変化を楽しむ。
- 3 内容
 - ・ロウが溶ける様子や固まる様子、月桃粉の色に染まる様子を視覚で楽しむ。
 - ・月桃の香りを味わう。
 - ・ろうそくの状態を視覚、触覚で感じる。
 - ・火を灯したキャンドルを視覚、嗅覚で楽しむ。

4 活動設定の理由

幼稚園教育要領、領域「環境」内容(4)に『自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ』、内容(7)に「身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」とある。『要領解説』において、ものに対する興味や関心は「他の幼児や教師などと感動を共有したり、共にその対象にかかわって活動を展開したりすることによって広げられ、高められていく」ことや、「その対象と十分にかかわり合い、好奇心や探究心を満足させながら、自分でよく見たり、取り扱ったりすることにより、さらに高まる」ことが示されている。さらに、「情動や心情を伴う体験は幼児の心に染み込み、幼児を内発的に動機付け」新たな興味や関心がわいてくることが記されている。

これらのことから、教師が、「幼児」と「物・自然」とが豊かに出会える環境づくりに努め、幼児がじっくりと「物・自然」とかかわることのできる環境を保障し、教師が適切な幼児理解のもと援助を工夫することにより、幼児の興味・関心がさらに高まり自ら環境へかかわっていくであろうと考え、本活動を設定した。

(1) 教材観

本時では、月桃を活用した月桃キャンドル作りを行う。地域特性の植物である月桃は、香りに特徴があり、嗅覚を刺激する。ムーチーの際は月桃の葉で餅を包み、茎を紐にして結ぶといった活用をした。その経験を踏まえ、本時では月桃の葉を粉末状にして活用するという新たな工夫について知らせたい。ろうそくは生活の中での使用頻度が低く、使用する際でも幼児が手に取ってその感触を味わう機会が少ないと捉えている。そのろうそくを実際に手に取り触れる経験は、視覚や触覚を通してろうそくの性質を知る経験になると考える。また、ロウは温度によって状態が変化し、その様子を視覚に楽しむことができる。さらに、ロウと月桃粉と一緒に加熱すると月桃の色や香りが次第に滲み出し、その美しさ、不思議さ、心地よさを味わうことができる。火を灯したろうそくからは、炎の形や色、動きに美しさや面白さを感じる事ができ、ろうそくの味わいを感じる事ができる。

本時の保育では、幼児が「物(月桃、ろうそく)」と十分にかかわることのできる環境(物、時間、空間)を構成し、「感覚で『物(月桃、ろうそく)』にかかわる」経験を保障することで、「物(月桃、ろうそく)」への興味・関心をさらに高め、他の「物・植物」への興味・関心を培ったり、自然を生活に取り入れる工夫を示すのに有効な教材であると考え。

(2) 幼児観

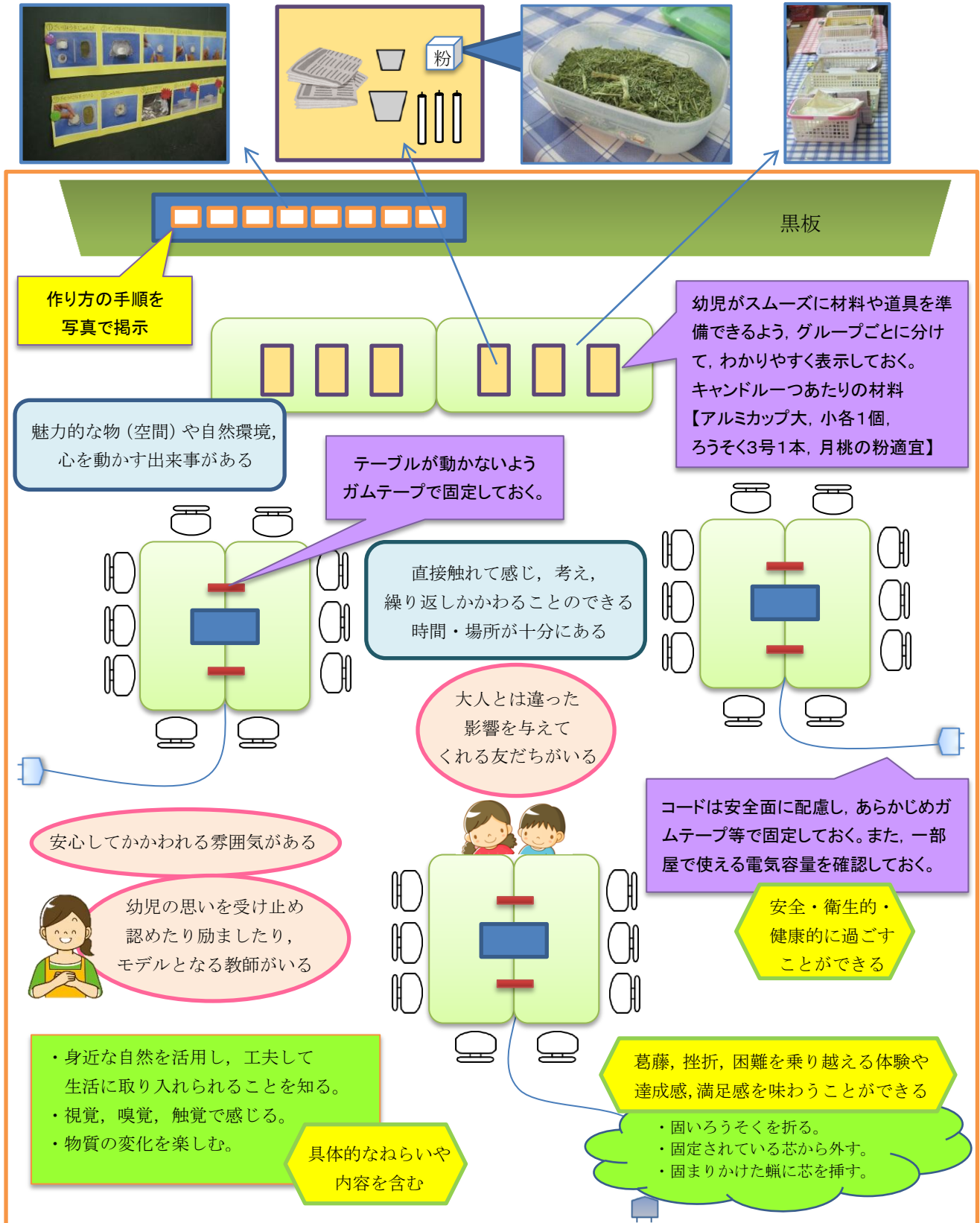
自ら好きな遊びに取り組む幼児が多い。一方、好きな遊びの種類や活動範囲が狭く、課題活動に消極的な幼児がいる。クラス全体を見ると、いろいろな遊びに興味をもってかかわっていく幼児が約6割、室内遊びを好んだり遊びの種類に偏りのある幼児が約3割、積極的に遊ばない幼児が約1割おり、一人一人の経験の仕方や遊びへの意欲に差を感じる。家庭アンケート調査結果より入園前の遊びの様子を見ると、戸外・室内の遊び時間は同程度であったが、戸外遊びの内容では「固定遊具」や「ボール遊びや縄跳びなどの運動遊び」が過半数を占め、自然体験活動が少ない様子が見られた。また、現在の家庭での遊びの様子では、戸外より室内での遊び時間が長い傾向を示し、戸外遊びの内容はやはり「固定遊具」「ボール遊びや縄跳びなどの運動遊び」が約半数を占め、現在も家庭での自然体験活動が少ない様子が伺える。

(3) 指導観

月桃の葉を活用してキャンドル作りを行うことで、身近な自然を様々な形で生活に取り入れる工夫について知らせたい。また、ろうそくへ「香り」をつける作業を通して、その他の植物の「香り」にも興味・関心を抱かせたい。さらに、その他の自然の色や模様にも関心を向けるきっかけになってほしいと考える。香りをつけるための過程においては、月桃の葉を粉末状にして活用し、自然が様々な状態に変化する面白さを感じられるようにする。その経験の中での感情・感動体験が、さらにその他の「物・自然」への興味・関心を高め、自然・科学への関心の芽生えにつながると考える。ロウに熱を加えたりろうそくに火を灯す過程は多少危険を伴うが、熱さを考慮して物を扱う経験や、火の扱い方を知る経験となる。ロウを加熱する過程では、安全に注意を払い、月桃の香りや色が滲み出る様子に気づかせるようにする。また、幼児の現象への気づきや感動、驚きを受け止め、共感しながら幼児と一緒に活動を楽しむ。さらに、幼児が「月桃キャンドル」を十分に楽しめるよう、環境(物の量、時間と空間)を保障する。

指導案 平成 25 年 1 月 24 日 (木)		そら組 男児 16 名 女児 13 名 計 29 名 保育者:鈴木 涼子		
＜主な活動名＞ 月桃キャンドルを作ろう				
研究 仮説	・幼児が五感を通して感じることができるような環境を構成し、感情・感動体験、身体的直接体験を豊かにすることで、「物」への興味、関心が芽生えるであろう。			
ねらい	・身近な自然を活用し、工夫して生活に取り入れられることを知る。 ・視覚、嗅覚、触覚で感じる。 ・物質の変化を楽しむ。	内容	・ロウが溶ける様子や固まる様子、月桃粉の色に染まる様子を視覚で楽しむ。 ・月桃の香りを味わう。 ・ろうそくの状態を視覚、触覚で感じる。 ・火を灯したキャンドルを視覚、嗅覚で楽しむ。	
時 間	○予想される幼児の姿	☆教師の援助	*働かせる感覚	*評価項目 (幼児の姿) 環境構成
10:00	☆前々日の活動(月桃粉を作ったこと)を振り返り、今日の活動について質問を投げかけ、ヒントを出したり使用する道具を見せたりしながら幼児が考える時間を設ける。 ○「ケーキ」「クリーム」「ろうそく」など思い思いの答えを出す。 ☆月桃キャンドルを作ることを伝え、作り方の手順を写真を見せながら説明する。その際、ろうそくの折り方や入れる月桃粉の量など、幼児が戸惑いそうな場面を言葉や手本で丁寧に示すようにする。月桃粉の量に関しては、一個めと二個めで量を変える提案を示し、その違いに興味を持たせるようにする。 ☆安全に活動ができるよう、ホットプレートや溶けたロウが熱いことを伝え、注意を促す。			*これから の活動に関 心を持って いるか。 *ろうそく に関心を持 っているか。
10:15	☆椅子を出してグループごとに着席するよう指示し、当番に道具や材料を取りに来てもらう。準備ができたら活動を始めるよう声掛けする。 ○ろうそくの固さや芯の状態に興味を示す。○工夫しながらろうそくを折る。 ○ろうそくの固さや芯からなかなか外れないことに戸惑い、教師や友だちと相談したり確認したりしながら活動を進める。 (*視覚・触覚・嗅覚) ☆活動の進み具合を見守りながら、やり方を教えたりアドバイスをするなど、必要に応じて援助する。			*ロウが溶 ける様子や 色の変化に 関心を持っ ているか。
10:35	☆グループごとに準備ができたことを確認した後、キャンドルの一つをホットプレートに乗せるよう指示し、再度注意を喚起してから加熱を始める。 ☆ロウが溶ける様子を見守りながら、ろうそくの状態がどうなっているか問いかけ、状態の変化に気づかせるようにする。 ○ロウが溶ける様子に気づき、驚きや感動を表す。 (*視覚) ○月桃の香りや色が出てきたことに気づく。 (*嗅覚) ☆色や匂いへの気づきの声を拾いながら幼児の気持ちを受け止め、幼児と一緒に香りや状態の変化を楽しむ。			*月桃の香 りを味わっ ているか。
11:05	☆グループの全てのロウが溶けるのを確認して加熱を止め、幼児と一緒に芯の用意をする。 ☆芯を入れるタイミングのロウの状態を知らせ、ロウの変化に関心を持たせる。ロウの状態を確認し、芯の入れ方を説明しながら活動を進める。その際、ロウが熱いことを再度伝え、扱い方に注意を促しながら幼児が芯を入れる様子を見守り、必要に応じて援助する。 ○色の変化やロウが固まる様子に気づき、驚きや感動を表す。 (*視覚・嗅覚・触覚)			*ロウが固 まる様子や 色の変化に 関心を持っ ているか。
11:20	☆全てのキャンドルが出来上がったらホットプレートを片付け、一人一人のキャンドルに火を灯す。火を灯す前に月桃の香りについて言及し、香りへの関心を高める。また、保育室のカーテンを閉めてろうそくの明かりや雰囲気より味わえるようにする。また、火には近づかないよう注意を促す。 ○ろうそくの雰囲気や明るさを味わう。 ○炎の様子に興味・関心を抱く。 ○匂いに関心を持つ。 (*視覚・嗅覚) ☆安全面に配慮しながら、幼児と一緒にろうそくの雰囲気を味わう。 ○火を消した後のろうそくの状態に関心を持つ。 ○芯が黒くなったことに気づく。			*ろうそく の炎や雰 囲気に関 心を持っ ているか。
11:30	☆他の植物の香りに言及し、月桃以外の自然物への興味・関心を広げるようにする。			*自分が作 ったキャ ンドルに 愛着を持 っているか。
評価 の 観 点	*幼児が興味・関心を抱くような話の進め方をしていたか。 *幼児が五感を働かせ、感じたり考えたりする時間を十分に設けることが出来ていたか。 *幼児の興味・関心を理解するように努め、心の動きに応答したり共に考えたりして、幼児の「物」への興味・関心を高める援助が出来ていたか。 *教師自身が楽しんで取り組んでいたか。 *環境の構成は適切であったか。			

〈本時の環境構成〉



VI 仮説の検証

1 これまでの活動と活動計画

本研究では私自身の実践だけでなく、担任の協力を得て研究テーマに沿った保育実践を9月から継続して行ってきた。そこで、9月から2月の間の幼児の姿から保育を検証していくこととする。9月から12月までは好きな遊びや設定保育の中での「自然」や「物」とのかかわりに焦点を当て、研究テーマに沿った活動を取り上げて検証する。12月18日からは、ムーチャーという地域の行事をきっかけにして、「月桃」という自然へ五感でかかわっていく活動を設定していく。その中で、様々な「自然」や「物」と出会う環境を整え、興味・関心を培っていきたいと考えた。

時期及び月日 【遊びの場】 (活動の時間)	ねらい	主な活動内容	●環境構成 ☆教師の援助 (かかわった自然や物)
9月	○身近な自然に関心を持つ。 ○感触遊びを楽しむ。	◎押し花づくり ◎スライム遊び ◎泥遊び	●身近な自然の活用、教材の準備、十分な活動時間。 ☆活動時間にゆとりを持つことで、身近な「自然」や「物」へ十分にかかわることのできる環境を整える。 ☆教師も一緒に楽しみながら、自然や物へかかわる姿を示す。 ☆幼児の感情や気づきを受け止め、他の幼児へ気づかせるようにする。 (花、葉、糊、絵の具、ホウ砂)
10月	○栽培活動を通して自然に興味を持つ。	◎ジャガイモ植え ◎泥遊び	●畑の整備、栽培物の準備。 ☆絵本でジャガイモに関心を持たせる。 ☆率先して畑に入り、土の感触を楽しむ姿を見せることで、土に触れる心地よさを知らせる。 ☆日々、幼児と一緒に成長の様子を観察しながら気づきを受け止め、ジャガイモへの興味・関心を培うようにする。 (土、種イモ、雑草)
11月	○自然に興味を持ち、かかわって遊ぶ。 ○目的を持って製作に取り組む。	◎秋の遠足 ◎生活発表会へ向けての取り組み(段ボールとのかかわり) ◎泥遊び	●自然環境の下調べ、課題、クイズの用意。 ☆課題やクイズを用意し、楽しく自然へかかわれるようにする。また、幼児の気づきや感情を共有し、さらなる自然への興味・関心を培うようにする。 ●製作に使える素材、道具の用意。 ☆発表会の劇の小道具を幼児が楽しみながら行えるよう、幼児と一緒に道具や素材を準備する。 (松ぼっくり、草、斜面、川、池、木、段ボール、絵の具、マジックペン、クレヨン、ビニール)
12月	○様々な遊びに挑戦する。 ○自分の思いを表現しながら、工夫して製作を楽しむ。	◎生活発表会 ◎運動遊び ◎段ボール遊び	☆幼児の挑戦する姿を見守り、頑張る姿を認めたり励ましたりする。 ●製作に使える素材、道具の用意。 ☆幼児が自分なりのイメージを表現する過程を見守り、必要に応じて、一緒に素材を探したりアドバイスをしたりする。 (段ボール、運動遊具)
12月18日 (火) 【保育室】 (設定保育)	○様々な素材に親しみ、感触を味わいながら飾りつけを楽しむ。	◎クリスマスブーツ作製 ・廃材スタンプ・切り紙・クラフトパンチ・絵の具・綿・クーピー・クレヨンを活用して、ブーツの飾りつけをする(視覚・触覚)。	●各コーナーで使う素材の準備。 ☆スタンプの仕方、クラフトパンチの使い方、綿の貼り付け方の見本を示し、コーナーの紹介をする。 ☆幼児の活動の様子を見守り、必要に応じて手本を示したり、一緒に行ったり、表現を認め感想を伝え、共感したりする。 ☆幼児一人一人が様々な素材に十分にかかわることができるよう、十分な時間と素材の量を保障する。 (カップ、キャップ等の廃材、折り紙、クラフトパンチ、絵の具、筆、ボンド、糊、綿)
12月20日 (木) 【園外】 (設定保育)	○自然物や自然事象に触れ、不思議に思ったり、興味・関心をもつ。	◎アダム公園へ遊びに行く。 ・公園への往復路に咲いている草花や栽培物、生き物、せせらぎなどを見たり、触れたり、聴いたりして楽しむ(視覚・聴覚・触覚)。 ・アダム公園では身体を思い切り動かして楽しむ。また、公園内の植物に関心を持ってかかわる(視覚・触覚)。	●見つけた自然物を持ち帰れるよう袋を用意する。 ☆自然物に関心を持てるよう、出発前に言葉かけをする。 ●自然に十分にかかわることのできる時間を設ける。 ☆幼児が発見したり感動している姿を認め、幼児の気持ちを言葉で表現したり、教師自身の思いを言葉で表現するなどして気持ちを共有する。また、幼児の気づきや感動を教師がクラス全体に知らせたり、一緒に驚いたり味わったりしながら、友だちの気持ちに気づかせるようにする。 (雑草、花、葉、虫、しずく、魚、落ち葉、木の根、種)

<p>1月10日 (木) 【保育室】 (設定保育)</p>	<p>○身近な植物に関心をもつ。</p>	<p>◎ムーチーの紐作りに向けて ・初めは目隠しで袋に入った月桃の葉の匂いを嗅ぎ、次に月桃の葉の一部を手にしながら匂いを嗅ぐ。 ・小学校校庭裏に月桃の葉を探しに行く(視覚・嗅覚・触覚)。 ・その他の植物にも関心を持つ(視覚・嗅覚・触覚)。</p>	<p>●小さく切った月桃の葉を用意する。 ☆すべての幼児がじっくりと匂いを嗅ぐ時間を設ける。 ☆幼児が匂いを嗅ぎ、考えたりひらめいて喜ぶ姿を認め、幼児の言葉を拾いながら気持ちを受け止める。 ☆小学校敷地内を散歩しながら、幼児と一緒に植物を観察し、葉の匂いを嗅いで確かめながら月桃の葉を探す。 ☆月桃以外の植物や自然物に関心を向けている様子が見られる時は、一緒に考えたり観察したりして、より興味・関心が高まるようにする。 ●採ってきた月桃の葉を保育室内に置き、自由に見たり触ったり嗅いだりできるようにする。 (月桃、竹、バラ、いろいろな植物の葉とその匂い)</p>
<p>1月11日 (金) 【保育室】 (設定保育)</p>	<p>○ムーチーについて知り、月桃の葉に関心をもつ。 (自然に触れる)</p>	<p>◎ムーチーの紐作り ・月桃の茎をたたいて紐を作る(視覚・嗅覚・触覚)。 ・金槌を使う経験をする(視覚・触覚)。</p>	<p>☆月桃と金槌を見せながら何を作るか考える時間を設け、月桃への関心を高める。 ☆ムーチーの作り方の手順を写真で示し、写真の中にヒントが隠れていることを伝える。活動を進めながら考えるよう伝えるよう伝え、月桃への関心をさらに高める。 ●月桃、新聞紙、段ボール、金槌をグループ分用意する。 ☆幼児が茎をたたきながら、感触や匂いなどを味わう姿を認め、茎がつぶされて繊維状になる不思議さや月桃の香りを言葉で表現しながら、興味・関心がより高まるようにし、幼児の気持ちに共感する。繊維状になった茎とムーチーの写真とを結び付けるよう言葉かけし、紐になることに気づかせる。その際、感動を一緒に分かち合う。 ●新聞紙の上に繊維を広げ、保育室内の幼児が自由に見たり触ったりできる場所に置いて乾燥させる。(金槌、月桃の茎)</p>
<p>1月16日 (水) 【保育室】 (設定保育)</p>	<p>○もち粉の感触を味わう。</p>	<p>◎ムーチー作り① ・もち粉をこねる(視覚・触覚)。</p>	<p>●もち粉、黒糖、ボール、水を用意する。テーブルにはビニールを敷いておく。 ☆もち粉の状態の変化を楽しめるよう、粉の状態から感触を味わい、教師が水を少しずつ加えていく。一人一人が十分に感触を味わえるようにするために、十分な時間を設ける。 ☆一緒にこねながら感触を言葉で表現し、幼児と気持ちを共有する。(もち粉)</p>
<p>1月17日 (木) 【保育室】 (設定保育)</p>	<p>○ムーチー作りを楽しみ、月桃の香りやムーチーを味わう。</p>	<p>◎ムーチー作り② ・前日にこねたもち粉を包む(触覚・嗅覚)。 ・蒸される際の月桃の葉の香りを嗅いだり、食べて味わったりする(嗅覚・味覚)。</p>	<p>●月桃の葉、紐、こねたもち粉、ボールを用意する。テーブルにはビニールを敷いておく。 ☆もち粉の感触や月桃の葉の香りを味わう一人ひとりの気持ちを受け止めながら包む様子を見守り、必要に応じて援助する。 ☆ムーチーが蒸される際、香りが味わえるよう釜の近くで見学できるようにする。その際に、香りについて幼児に尋ねたり、気持ちを表現している幼児の言葉を拾ったりして共感する。 ☆ムーチーと一緒に味わいながら味や香りについて言葉で表現したり、幼児が味や香りについて感じている様子を認めたりして、気持ちを共有する。 (月桃、ムーチー、ムーチーを蒸した後の汁)</p>
<p>1月22日 (火) 【保育室】 (設定保育)</p>	<p>○地域の植物である月桃の活用方法を知る。</p>	<p>◎月桃キャンドル作り① ・月桃の葉を切り刻む(視覚、触覚、嗅覚)。 ・電子レンジで乾燥させ、ミキサーで粉末状にする(視覚、聴覚、触覚)。 ・ざるでふるう(視覚、触覚、嗅覚)。</p>	<p>●月桃の葉、電子レンジ、ミキサー、ボール、ざるを用意する。 ☆活動の手順を手本を見せながら示す。変化した月桃の葉の様子を一人一人が見たり、嗅いだり、触ったりできるようにする。 ☆月桃の香りや葉の状態の変化に反応する幼児の姿や気持ちを受け止め、一緒に面白さや香りを味わう。 ☆幼児一人一人が活動にかかわれるよう、必要に応じて援助する。 (月桃、電子レンジ、ミキサー、ざる)</p>
<p>1月24日 (木) 【保育室】 (設定保育) 公開保育</p>	<p>○身近な自然を活用し、工夫して生活に取り入れられることを知る。 ○視覚、嗅覚、触覚で感じる。 ○物質の変化を楽しむ。</p>	<p>◎月桃キャンドル作り② ・ろうそくと月桃粉を組み合わせてキャンドルを作る。(視覚、嗅覚、触覚) ・ろうそくに火を灯し、その雰囲気や月桃の香りを楽しむ。(視覚、嗅覚)</p>	<p>●材料と道具を用意し、テーブルはあらかじめ2台ずつ固定しておく。 ●活動がスムーズに進められるよう、手順を写真で示す。 ☆材料や道具からこれからの活動を予想させ関心を持たせる。 ☆安全面に配慮しながら活動を進め、必要に応じて援助する。 ☆香りや色への気づきの声を拾い、幼児の気持ちを受け止め、感動や驚きに共感する。 ☆幼児と一緒に活動を楽しむ。 (月桃、ろうそく、アルミカップ、ホットプレート、新聞紙、火、熱)</p>
<p>2月5日 (火) 【園庭】 (好きな遊び)</p>	<p>○身近な環境に自らかかわって遊ぶ。</p>	<p>◎動植物にかかわって遊ぶ。 ・飼育動物や植物にかかわって遊ぶ中で、気付いたり発見したり、考えたりする。 ◎物にかかわって遊ぶ。 ・遊具や道具、素材を使って遊ぶ。</p>	<p>●自由に使用できる遊具、道具、素材を整えておく。 ☆幼児が自然や物とかかわる姿を大切に、一緒に考えたり共感したりする。 ☆園庭や小学校敷地の自然環境へ十分にかかわれるようにする。 (固定遊具、運動遊具、砂場道具、様々な素材、飼育動物、植物、砂、土、木、水など)</p>

2 ビデオ記録とエピソード記述から幼児の姿を捉える

研究テーマに基づく保育実践を通して、幼児の興味・関心が芽生えるような環境の構成と教師の援助ができたかについて、幼児の姿または変容をもとに検証する。その対象を「クラス全体」と「抽出児T, S」とし、好きな遊びや設定活動の様子に視点をあてる。抽出児T, Sについては、入園当初の姿を踏まえたうえで、その変容を見ていく。考察では、幼児が環境へかかわる「きっかけとなった環境および教師の援助」を波線「~~~~~」で、幼児が環境へ「かかわる, または, かかわろうとする姿や態度」を二重線「====」で示す。なお, 事例においては, 幼児の関心や感情の高まりを表すために「!」「?」「-」といった記号を用いて表記している。

研究仮説

園生活の中で、幼児が五感を通して感じることができるような環境を構成し、感情・感動体験や身体的直接体験を豊かにすることで、幼児の興味、関心が芽生え、自ら環境にかかわっていくようになるであろう。

4月の抽出児T, Sの様子	考察
T: 初めての集団生活である。入園当初の表情はこわばり、とても緊張していた。安心を求めるようにSと寄り添い、そら組からほとんど移動せず他児が遊ぶ様子を遠目に眺める。教師の姿が見える場所で一日のほとんどを過ごす。手遊びやリズム遊びの際はやらすに無表情で座っている。設定保育では絵を描いたり色を塗ったりといった活動に抵抗を示す。「暑いのが嫌」といって戸外で遊ぶことを好まない。	初めての集団生活で、園での活動はほとんど初めての経験であると考えられる。手遊びやリズム遊び、絵描きや色塗りは、不慣れであることから戸惑っていると捉える。夏の戸外遊びの楽しさより暑さへの不快感の方が強い。
S: 初めての集団生活である。Tと同じく安心を求めるように二人で寄り添う。行動の主導権はTにあり、Tの動きに合わせてついていく。Tに影響されてか、手遊びやリズム遊びの際は無表情で何もせずにいる。設定保育では絵を描く活動に抵抗を示すが、教師が手本を見せたり一緒に行ったりすると少しずつ描きはじめる。	初めての集団生活で不安が大きく、よりどころはTであることがわかる。活動の際に抵抗を示すが、教師の援助によって少しずつ活動し始める姿から、やり方がわからず行動に移せない様子が伺える。

9月(検証場面①)

【環境の様子】

- ・夏野菜栽培 ・松葉ボタン(色水遊び) ・石鹸(石鹸遊び) ・泥 ・砂場道具 ・運動遊具(大縄, フープ)
- ・ビオトープ(グッピーすくい)・腐葉土置き場(カナブンの幼虫探し) ・カバマダラ, オオゴマダラの幼虫飼育

クラス全体 ー好きな遊びー

夏休みに花の植え替えなどの園庭整備をし、花壇の黒々とした土が存在感を増した。幼児もそれに気が付いたのか、自然と土を手に取り、ままごとに使いだした。土と水を合わせて泥を作り「チョコクリーム」、それをスポンジに塗って「チョコケーキ」など、石鹸遊びで作っていた「クリームケーキ」と組み合わせてケーキ屋さんごっこが始まった。私も袖をまくって土と「チョコクリーム」を混ぜた「チョコレート」を作りテーブルへ並べた。「いらっしやいませー」と声を掛けると、数名の幼児が目を輝かせ「仲間に入れてー」とやってきた。ケーキ屋さんはケーキ職人やチョコ職人が自慢の商品を作り出し、たくさんの商品が並んだ。その様子を見て「うわぁー汚い」と顔をしかめる幼児もいたが、いろいろな形のチョコレートやケーキが作り出される様子をじっと見つめていた。

抽出児T, S

長い夏休みを終えTとSが久しぶりに登園してきた。4月から6月の園生活と夏休みの経験からか、二人の表情は以前に比べ少し自信をつけたように見えた。二人が職員室へ来て「外で遊んできていいですか?」と尋ねた。「いいですよ。涼子先生に聞かなくても好きな遊びをしていいんだよ。」と私が答えると、二人は嬉しそうに飛び跳ねて外へ出ていった。園庭では並んでブランコに乗って楽しそうに過ごし、20分ほどして室内へ戻った。その1週間後、登園すると二人が「粘土遊びをしていいですか?」と尋ねてきた。私が「どうぞ!」と答えると自分の粘土を出して遊び始めた。

【考察①】

すぐに環境の変化に気づき遊びに取り入れる幼児の姿から、環境の変化が幼児に影響を与えていることがわかる。土に関心を持ち、進んで遊びに取り入れる幼児と、「汚い」と顔をしかめる幼児の姿から土への姿勢が見えてくる。進んでかかわる幼児はこれまで土に触れたことがあり、さらにその際「心地よい」と感じたのであろう。逆に「汚い」と感じた幼児は、これまで土に「触れることが無かった、または少なかった」か、触れた時に「心地よいと感じなかった」経験があるのだろうと考える。しかし、そのような幼児が、泥にかかわって遊ぶ様子をじっと観察している姿は、楽しそうに泥遊びをする幼児や教師の姿を見て、少なからず泥遊びに関心が芽生えていると捉える。抽出児TとSは、園生活のリズムが定着し、少しずつ周りへの関心が出てきたように思える。登園後、教師に遊んでいいか尋ね、教師が「尋ねずに好きな遊びをしてもよい」と伝えているにも関わらず次も同様に尋ねる姿からは、「遊びたい」気持ちはあるが「自ら決定し行動すること」に対して不安を感じているように見える。また、これまでの彼らの環境が、「好きな遊びを自分で選択できる環境」でなかったとも推測できる。

10月(検証場面②)

【環境の様子】

- ・松葉ボタン(色水遊び) ・石鹸(石鹸遊び) ・運動遊具(大縄, フープ) ・砂場道具 ・飼育動物
- ・腐葉土置き場(カナブンの幼虫探し) ・ビオトープ(グッピーすくい) ・廃材(製作)

クラス全体 -好きな遊び-

初旬、女児の間では色水遊びや石鹸遊びが盛り上がり、男児は月刊誌の迷路遊びや製作などの室内遊びが多かった。中旬になると鬼ごっこをする幼児が増えてきたが、教師を誘って始まることが多く、教師が抜けると終わってしまうこともよくあった。

抽出児T, S -好きな遊び-

T, S, Uの3人が小人の家(園庭に設置されている固定遊具)の近くの泥の上に道を作っていた。Uがジョウロで水を流し「わあー!流れた!」と叫ぶと、そばにいたTが「ほんとだー!」と歓声を上げた。さらにUは、土を掘り続けて水の流れを作って楽しんでた。その姿を見てTが「Tも(やる)!」と叫び、何度も往復しながら水を運んでいた。SもTと一緒にジョウロに水を汲み流していた。Uが「そうだ!橋を作ろう!」と言って木の棒を道の上に置いた。その下を水が流れていく。Tはこの状況には特に反応せず、ひたすら水を流しその流れを見て喜んでた。Uが両手で土や泥水に触れているのを見てTが少し泥水を触った。自分の手を無言で見つめ、濡れた手をどうしたらいいのかが考えているように見えた後、手を振って乾かした。教師が「Uさん、気持ちよさそうだね」と声を掛けると、その言葉を聞いて「Tも触ってみる」とTが泥水に両手を入れた。すると、泥水がはね服が汚れてしまった。Tは教師に「服が汚れた。どうしたらいい?」と尋ね、教師は「着替えがあるなら着替えたなら?」と答えた。すると「うーん」と考えていたTだったが、隣で楽しそうに遊ぶUを見て「いっか。お着替えがあるから大丈夫だね。」と言って遊び続けた。片付けの時間になるとTが「明日もやるぞー!」と元気に宣言した。その後の、ある大雨の翌日。TとSは職員室へやってくる「泥水に入っているいいですか?」と教師に尋ねた。その後、数名の幼児と一緒に大きな水たまりに手を入れたり、水を蹴ったりして楽しんでた。

【考察②】

好きな遊びの様子から、幼児が個々の興味・関心にしがたって遊びを楽しむ姿が見られる。中旬ごろ、戸外での鬼ごっこを楽しむ幼児が増えてきたが、遊び始めに教師を誘ったり、教師が抜けると遊びが終わってしまう様子から、幼児が夢中になれるほどの遊びが見つからない様子や、幼児同士の関係がまだ浅い様子が伺える。抽出児TとSは、友だち関係が少し広がり、Uを交えて遊ぶ姿が増えてきた。Uは製作や戸外遊びなど自分の思いを伸び伸びと表現しながら遊ぶ幼児である。そのUの楽しそうな姿に触発されTも水遊びを始める。Tは水の流れる面白さに魅かれたようだ。それは、Uが木の棒で橋を作ったがそのことには目もくれず、ひたすら水を流して楽しんでた姿からも見てとれる。手を泥水につけた時に濡れた手を見つめる姿や、はねた泥水の汚れを気にする姿から、彼が「泥の汚れに対する抵抗感」と「水遊びの楽しさ」の間で葛藤を抱いている様子が伺える。しかし、その後の教師の「楽しそうだね」という言葉や、Uの楽しそうに遊ぶ様子を見て前向きな行動を起こした姿から、教師の言葉や友だちの姿がTの行動に大きく作用していることがわかる。「明日もやるぞー」と言うTの言葉から、「泥遊びの楽しさ」が「泥水への抵抗感」を上回ったことが伺える。後日、教師に「泥水に入っているいいですか?」と尋ねるが、その言葉から、これまで彼が「泥水は入ってはいけない場所」と捉えていたことが予測できる。さらに、泥水とのかかわりが大胆になっている姿から、泥水を心地よく感じ、以前よりも身体全体でその楽しさを味わっている姿が伺える。

11月2日(検証場面③)

<p>【環境の様子】・木(の実) ・葉 ・森の生き物 ・せせらぎ ・石 ・斜面 ・段ボール ・課題、クイズの設定</p>
<p>クラス全体 ー遠足(県民の森へ)ー</p> <p>秋の遠足は親子で恩納村に位置する県民の森へ出かけた。「ミッション」と題して自然探索の課題が3つ(「松ぼっくりを探そう」「黄色の葉っぱを見つけよう」「森の生き物を探そう」と、自然に関するクイズが6つ出され、事前にクラスで決めたグループで取り組むという活動を設定した。課題やクイズを与えられグループの友だちと相談しながらの活動に、スタート時点から皆張り切っていた。特に、前日までにグループ決めをし、友だちと協力して袋を作成したこともあってか、グループの連帯感と課題への意欲を感じた。ミッションが始まると皆、地面から木の上まで目を凝らして観察しながら歩き、時々枝や葉を手にとって友だちと相談していた。せせらぎでは、皆思い思いに石や枝などを水面へ投げ入れ、あがるしぶきを見ては、また石を拾って投げ…と何度も繰り返していた。時折、台風で倒れた木があるとその上を歩き、傾きや揺れを楽しんでいるようであった。</p>
<p>抽出児T, S ー遠足(県民の森へ)ー</p> <p>Tは、自然探索が始まると進んで友だちと相談をしたり、自ら鉛筆を持って書き込んでいた。せせらぎでは、石や枝を水中に投げ入れ、水の動きをじっと見ていた。昼食後、芝の生えた斜面で段ボール滑りが始まった。Tは段ボールを手に入れ斜面へ走っていった。始めは恐々滑っていたTだったが、一度滑ると「わぁー！楽しいー！」と大きな声で叫び、満面の笑みで何度も滑っていた。</p> <p>Sは、探索が始まり、グループの友だちが側溝に落ちている木の枝を覗き込む後方から、恐る恐る覗き込んでいた。友だちが上半身をかかめて落ち葉を手取る姿を、Sも横から見つめるが、どうしてよいかわからない様子で立ち上がり移動した。途中のせせらぎでは長めの枝を水中に入れ、葉を手繰り寄せたり浮遊物を引っ掛けたりしてまじまじと観察していた。昼食後、Tと共に自分で段ボールを手に入れ、Tよりも素早く斜面へ走っていった。滑り方はゆっくりではあるが、草や斜面の感触を十分に味わいながら滑っていた。特に声を出さずにはないが、笑顔で滑り終えてはまた登り、自分で場所を見定めて何度も滑っていた。</p>
<p>【考察③】</p> <p><u>課題が設定されていたことで、森にすむ生き物を探したり、植物を手にとってよく観察したりと、自然への関心が高まったと考える。</u>森の中では、水中に石を投げたり倒れた木の上を歩いたり、幼児一人一人がそれぞれの興味・関心に応じて活動を楽しんでいた。特に<u>水辺で足を止めて遊ぶ幼児は多く、変幻自在に形を変える「水」が、幼児にとって面白さや不思議さを味わえる魅力的なものだと捉えられる。</u>しかし、その活動の傍では幼児の行動を制止する保護者も多く、普段から思う存分水とかかわって遊べる幼児は少ないであろうと推測した。夏は暑さを避けて戸外活動を好まなかったTとSだったが、少しずつ園庭での遊びに興味を示し始めた時期であったことや、<u>遠足に向けてのグループでの活動で友だち関係が深まったことが要因となったのか、Tは積極的に「自然」と「友だち」へかかわる姿が伺えた。</u>Sは進んで「自然」に触れようとはしないものの、<u>覗いたり一緒に考えたりなどの様子が見られ関心を持つ姿が伺えた。</u>また、<u>水辺では積極的に水中を観察していたことから、水の中の様子や周辺に住む生き物に強い興味・関心があったと考える。</u>また、段ボール滑りでは、<u>先に滑る友だちの楽しそうな姿に刺激され、自ら交渉し、走って坂へ向かう二人の姿から、段ボール滑りへの強い興味・関心が見てとれる。</u>普段Tの後を追って行動しているSが、<u>Tより素早く走っていったのは、段ボール滑りへの興味・関心が彼を突き動かしたからだ</u>と考える。斜面で最初は恐々滑っていた二人が<u>何度も繰り返し滑ったのは、回数を重ねるにつれて「斜面を滑る感覚」を身につけ、その感覚を楽しめるようになったから</u>だと考える。さらに、抽出児を含む<u>多くの幼児が何度も繰り返し滑っていたのは、身体感覚への刺激を心地よく感じ、その感覚を何度も味わいたいから</u>であると考える。身体でダイレクトに感じる感覚運動遊びは、<u>幼児が夢中になれる遊びであることがわかる。</u></p>

11月14日(検証場面④)

<p>【環境の様子】</p> <p>・運動遊具 ・砂場道具 ・木 ・飼育動物 ・廃材(製作)</p>
<p>抽出児T, S ー好きな遊びー</p> <p>園へ行くと、TとSがさっそく私を見つけ「涼子先生！おはよう！あの一、木に上りたいんですけど…」と話しかけてきた。そして、園庭の端にある一番登りやすい木へ一緒に向かった。私が、裸足で登ると登りやすいことをアドバイスすると、さっそく靴下を脱いで「わぁーほんとだ！裸足だと登りやすい！」と言いながら登り始めた。そして上を見上げて「わぁ！葉っぱがいっぱい！」、下を見下ろして「涼子先生よりもでかいよ！」と嬉しそうに言いながら、木から見える景色や高さ、足裏の感触を楽しんでいた。一度目の木登りの後は、汚れないように靴の上に降り、すぐ</p>

靴下と靴をはいて別の遊びへ移行していった。

その後、また二人へ誘われ木登りへ行くと、二度目は自信満々に靴下を脱ぎ、しっかりと手元と足元を見据えて登り始めた。二度目の木登りを十分に楽しんだ後、二人は裸足のまま砂地に降り、砂遊びやジャングルジム遊びを積極的に楽しんでいた。

【考察④】

秋の遠足を通じて自然が身近なものになったのであろうか。二人は木登りに関心を示した。さらに教師の言葉かけによって裸足になったことで、手だけではなく足裏でも木に触れる状況が生まれた。「裸足だと登りやすい」という言葉から、足裏でしっかりと木の感触を感じている様子が伺える。さらに、木の上で見上げた時の「わぁ、葉っぱがいっぱい」という言葉や、下を見下ろして「涼子先生よりもでかいよ！」と興奮気味に言う姿からは、これまで味わったことのない感覚世界を二人が味わっている様子が伺える。この経験は二人にとってとても魅力的だったようで、数分後二度目の木登りへと向かう。一度目とは違い、しっかりと自分自身で足の踏み場を選びながら登るTの姿から、「木」を知り、木にかかわる自信を得たと感じた。その後、二人が裸足のまま砂地に降り遊び続けたのは、「裸足の心地よさ」が「汚れへの抵抗感」を上回ったのであろうと考える。さらに二人が次第に活発になったのは、「木」や「地面」などを直接身体で味わったことによって、自然環境(戸外環境)に親しみが生まれたからだと考える。

12月18日(検証場面⑤)

【環境構成】

・折り紙 ・絵の具 ・綿 ・廃品 ・クラフトパンチ ・ボンド ・のり

クラス全体 ークリスマスブーツ作りー

12月21日のお楽しみ会に向けてクリスマスブーツを作り装飾をした。去年までは、「折り紙での切り紙」と「クレヨンでの装飾」のみであったが、今年は「絵の具」、「綿」、「廃品スタンプ」、「クラフトパンチ」等、様々な素材と道具を用意し、幼児が自分なりの表現を楽しめるようにした。各コーナーを紹介すると喜びの声があがった。活動が始まると皆思い思いに好きなコーナーへ向かい、絵の具で伸び伸びと色を塗ったり、使い慣れないクラフトパンチに力を込めて切り抜きを作ったり、綿コーナーでは綿を集めて顔を突っ込んでその感触を楽しんだりしていた。廃品スタンプは、カップや芯でかたどった円や、段ボールの切り口の模様を楽しんでいた。容器の上部分と下部分では円の大きさが違うことに気づき、円を重ねたり連ねることを楽しむ幼児もいた。

抽出児T, S ークリスマスブーツ作りー

前日、担任から廃品スタンプのことを聞いていたTとSは、自宅からペーパーの芯やカップなど、数種類の廃品を持ってきた。登園してから私や担任に廃品を見せながらスタンプの話をし、活動を楽しみにしている様子が伺えた。活動が始まると二人はロッカーから廃品の入った袋を取り、廃品とブーツを持ってスタンプコーナーへ近づいた。しかし、活動を始めるわけではなく自分の廃品を手にしながらか、スタンプを押す他の幼児の様子をじっと見つめるだけである。しばらくすると絵の具コーナーへ移動し、そこで装飾を楽しむ幼児の様子を見つめていた。活動が始まって約20分が経過した頃、二人はスタンプコーナーに自分のブーツを広げスタンプを選び始めたが、Tは他の幼児が使用してついた汚れが気になり一生懸命に落としていた。教師の確認をとった後、二人とも恐る恐る試し始めたが手に絵の具がついてしまい、Tは不快な表情を見せた。試すスタンプの数が一つ一つ増えるたびに、二人に笑顔が出てきた。そして、使い方を工夫したり勢いよく押すなどして、自分がつけた模様を嬉しそうに教師に見せた。最後は手に付けた絵の具をスタンプにして楽しそうに何度も押した。

【考察⑤】

普段あまり触れる機会のない綿やクラフトパンチを素材や道具として準備したことで、幼児の興味・関心が生まれ、子どもたちが活動に意欲的になったと感じる。活動への期待は、コーナーを紹介した時の幼児の喜びの声からも見て取れる。また、絵の具コーナーを教師が準備したことで容易に絵の具での表現を楽しむことができ、折り紙コーナーでも、様々な大きさの折り紙を準備していたことで、幼児にとって加工しやすく、イメージを表現するのに適していたと考える。

抽出児TとSは、自宅からスタンプに使う廃品を持ってくるなど、前日から活動を期待する気持ちが現れていた。活動の始めに二人が他児の様子をじっと観察していたのは、活動への興味はあるがどのように始めてよいのかわからず、友だちの活動から学んでいたからだと捉えられる。活動を進めるにつれて少しずつ絵の具の付き具合がわかってきたことにより、安心していろいろなスタンプを試すようになったのであろう。また、次第にスタンプの形や色に興味が生まれたことによって、他のスタンプも試したくなったのであろうと考える。スタンプを介して絵の具の楽しさを味わった二人は、手についた絵の具にも親しみをを感じるようになり、その汚れも楽しめるようになったと考える。

12月20日(検証場面⑥)

<p>【環境の様子】 ・公園までの往復路や公園で出会う自然(植物, 魚, 虫, 水など) ・公園の固定遊具</p>
<p>クラス全体 一園外保育ー</p> <p>地域にある「アダン公園」へ行く途中, 私はアワユキセンダングサを見つけ, その花びらを1枚採り唇にあて音を鳴らして見せた。後ろに2列に並んでいた子どもたちは, 私のその姿を不思議そうに見るや否や, 我先にとセンダングサの周りに集まり花びらを採りだした。力任せに吹きなかなか音が出ない子どもたちは, 私が鳴らす様を見て「先生! どうやるの?」と興味深げに聞いてきた。「唇に優しくあてて, ふーって吹いてみて」とアドバイスすると, 息の出し具合や唇への当て方を調整しながら, 何度も試していた。音が鳴ると大喜びし, 何度も鳴らしたり友だちに聞かせたりしていた。センダングサの若い種を「くつつき虫」と言い, 友だちや教師の服に付けて楽しむ幼児もいた。田んぼ道に入ると, Bが「涼子先生! 洋服にくつつき葉っぱだよ! 後ろが白くなっている葉っぱはくつつきだよ。」と葉を服につけて見せてくれた。他の幼児もそれを真似て自分の服に葉をつけて喜んだ。それからは, 皆歩きながら様々な葉を触っていた。そんなとき, Oが小さな虫の声に気づき「何の鳴き声だろう」と言ったのを機に皆で耳を澄ませ「コオロギかな」と話し合った。さらに進むと, 田芋の葉にしずくを見つけ「何かゼリーみたい」「卵みたい」「でっかいのが踊ってる!」「青虫が生まれるお布団じゃない?」などと思いつきに呟いていた。また, せせらぎの中に小さな魚を発見した幼児は, 水中を覗きこみ興味深く観察していた。</p> <p>公園では, 落ち葉を集めたり木の根っこを引っ張り合ったり, 砂の上にいる生き物を観察して楽しんでいた。</p>
<p>抽出児T, S</p> <p>列の後方から歩いていたTとSは, 私と前方の幼児らがアワユキセンダングサの花びらで笛遊びをしているのを遠巻きに見ていた。他の幼児が一生懸命試す姿を見て, 自分もやってみたくなったのだろうか, 少しずつセンダングサに近づき花びらへ手を伸ばした。Tは花びらを採った後, 何度か試すが音はならない。しかし, すぐにはあきらめず手にしていた別の葉でも試し始めた。Sも友だちや教師の真似をして試すが鳴らない。そんなとき, そばにいた別の幼児らが, センダングサの若い種部分を「くつつき虫」と呼び, 互いの服に投げ合って遊び始めた。それを不思議そうに見ていたSは, 偶然自分の足元に飛んできた「くつつき虫」を拾い上げ, まじまじと観察した。Tも他の幼児が投げ合っている「くつつき虫」を不思議そうに見つめ, 私の近くに来て「ねえ, あのくつつきはどこにあるの?」と尋ねた。私が「くつつき虫」の場所を教えると, センダングサのあちらこちらを覗き込み一生懸命に探していた。その場所を離れても, TとSは道端の「くつつき虫」を探し集めるのに夢中だった。</p>
<p>【考察⑥】</p> <p><u>教師がどこにでもある植物を活用して遊びに取り入れたことをきっかけに, 幼児の関心が自然へと引き付けられたと感じる。教師は花びらで「音を出す」(触れ, 聴いて楽しむ)というかかわり方を示したのだが, その後の幼児の姿からは, 「くつつき虫」をくつつき合って遊んだり, 葉を服につけてみたり, 虫の声に気が付いたり, しずくの様子を見て楽しんだりと「触覚」や「聴覚」, 「視覚」を働かせて環境にかかわっていく様子が伺える。一つの遊びによる感覚刺激から, 幼児の興味・関心が広がっていったと捉えられる。</u></p> <p>抽出児T, Sは, 他の幼児が「くつつき虫」を投げ合う姿を不思議そうに見ている様から, この日が「くつつき虫」との初めての出会いだったと推測できる。さらに, <u>その後もずっと「くつつき虫」を探し続ける姿から, 二人が「くつつき虫」に強い興味・関心を抱いていることがわかる。公園についてからのそら組の幼児が, 植物の葉や根, 生き物などに関心を示していることから, 往路での様々な自然とのかかわりが他の自然への興味・関心を生んだと考える。</u></p>

1月10日(検証場面⑦)

<p>【環境構成および環境の様子】 ・月桃 ・小学校敷地内に生えている植物</p>
<p>クラス全体 一月桃探しー</p> <p>1月17日にムーチーを控えたこの日, 「月桃探し」を行った。教師が小さく切った月桃の葉を準備しておき, 始めは中身を見ず, 匂いだけを頼りに, 二回目は匂いと葉の模様を頼りにして, それぞれ植物の名前を考えた。匂いだけで「ムーチーの葉っぱ!」と答える幼児もいれば, 葉を見てもよくわからない様子の幼児もいた。答えを言わずに「外に探しに行こう」と子どもたちを誘った。「探すときは, 手に持っている葉の匂いや模様, 感触をヒントにしてね」と伝えた。月桃の葉にもともと関心のあったRとIは張り切って先頭に並び, 早く目的地へ行ったような素振りを見せた。全員が集まっていざ出発すると, 皆私の誘導についてくるばかりで周辺の葉に目を向けない。私が「みなさん, もしかするとここにあるかもしれませんよ～」と話しかけると, 周辺にたくさんの植物があることに気が付き, 匂い</p>

を嗅いだり、模様を比べたり、手で触って「これはざらざらしているから違うなあ」などと比べ始めた。半数の幼児が様々な葉に触れながら探す一方で、前方に並んだ幼児半数は列を崩さず探す気配がない。それどころか「涼子先生！早く行こう！ここには無いよ！」と叫んでいた。あちらこちらの葉を観察しながら進んでいくと、前方の幼児が駆け出し月桃の葉を発見し「あったよー！」と叫んだ。そこは普段あまり目立つ場所ではなく、関心のある幼児にしか気づけないような場所であった。月桃の葉を見つけた子どもたちは喜んで葉を手に取り、友だちと匂いを嗅ぎ合ったり自分の持っている葉と模様を比べたりしていた。若い月桃の葉は黄色に近く、十分に成長したそれは濃い緑色であるが、「わかった！同じ月桃でも色が二つあるんだ！」と同じ月桃にも色の違いがあることに気づく幼児がいた。また、竹を触って「竹はつるつるだよ」、他の葉の匂いを嗅ぎ「スイカの種の匂いがする！」と嬉しそうに教師に伝える幼児もいた。活動終了後、保育室へ月桃を飾ると、葉に顔をうずめ香りを味わったり、月桃の茎や葉の様子をじっくり観察する幼児の姿が見られた。

抽出児 T, S 一月桃探し

月桃を発見した子どもたちの様子を眺めながら、似たような形の葉に目を凝らす。Tは半信半疑で葉を採り、私に「これかなあ」と言いながら見せにきた。そして葉の色と模様をじっくりと観察した。Sは自ら様々な葉の匂いを嗅いだり感触を比べたりするがなかなか見つからない。形の似た葉を採った後、模様を見比べ「これ、似てるけどなんか後ろと前が違う」とつぶやいた。その後も、いろいろな葉を採りちぎって匂いを確かめていた。Tは活動中、バラの花の香りを嗅ぐ他の幼児の姿に気が付きその様子を眺めていた。昼食後、TとSはバラの花を採りに行った。そして空き容器にバラを挿し、大事そうに持って私のところへやってきた。「涼子先生。いい匂いでしょ。」と言って、私の鼻先へバラを近づけた。私が「うわあ！とってもいい匂い！」と言うと、にこっと笑って「どこに飾ろうかな～」とつぶやきながら保育室の方へ歩いていった。

【考察⑦】

匂いだけで植物の種類がわかる幼児と葉の色や匂いを情報として与えてもわからない幼児、さらには、探索に出かける際に、月桃が生育している場所をすでに知っている幼児と、全く見当のつかない幼児がおり、普段からの自然とのかかわり方や自然への興味・関心に差があることがわかる。活動では「目的の葉を探す」という状況設定が、様々な葉に注目する動機付けとなり、幼児が視覚、嗅覚、触覚を十分に働かせて植物へかかわっていったと考える。五感を通してかかわっている様子は、月桃の葉を見つけて匂いを嗅ぎ比べたり、色や模様を比べて違いを発見する姿からも捉えられる。「月桃の葉の姿」と「月桃の匂い」が一体となった幼児は、足を進めるにつれあちらこちらに生えている月桃にいち早く気づくようになった。その姿から幼児が「月桃」を感覚的に意識に取り込んだ様子が伺える。さらに、月桃以外の植物の感触にも注目する幼児の発言から、他の植物への関心が芽生えていることがわかる。保育室に飾った月桃の葉に顔をうずめて匂いを味わったり、茎や葉の様子をよく観察したりする姿からは、幼児が活動によって月桃へ強い関心が芽生えたと同時に、直接見たり触れたりできる環境を整えることによって幼児のさらなる興味・関心が培われることがわかる。

抽出児についても例外ではなく、植物の匂いや色、模様に関心をもってかかわっており、さらに、この活動をきっかけに「バラ」という他の植物の匂いへ関心が広がっている様子が伺える。

1月11日(検証場面⑧)

【環境構成】

・月桃 ・金槌 ・ほぐした茎を水にさらして置く

クラス全体 ームーチーの紐作りー

この日は、月桃の茎を使ってムーチーの紐作りを行った。活動始めの段階では何を作るか幼児に知らせず、ムーチーの作り方の工程を写真で示し、写真の中に答えがあることを伝えた。普段、金槌にあまり触れることのない子どもたちは、金槌を使うことをとても楽しみにしているようであった。

茎をたたき始めると、少しずつ茎から汁が出てきた。それを見て「わかった！汁を作るんだ！」とつぶやく幼児や、茎の皮がめくれる様子を見て「茎が脱皮してる！」と驚く幼児がいた。茎がほぐれてくる頃、私が再び写真をヒントにするよう伝えると、「わかった！紐だ！だってほら、結べるもん！」とKが興奮して叫んだ。Kの言葉を聞いた他のグループも子どもたちも、月桃の茎と写真とを見比べながら、「あの(写真の中の、ムーチーを結んでいる)紐と色も似ているし、紐だはずね」と話し合った。私が、答えが「紐」であることを伝えると、予想が当たり喜ぶと同時に、ほぐれた茎を手にとりじっくり観察したり、不思議そうにさらに細くほぐす幼児もいた。ほぐした茎をたらいに入れて水にさらし、保育室入口に置いた。月桃から出てくる汁によるものであろうか、水は薄黒く濁っていた。降園時、迎えを待つ子どもたちが、そのたらいに手を入れ何度も何度も茎を揉んだり持ち上げたりしていた。

抽出児 T, S -好きな遊び-

TとSは、登園後すぐに、昨日保育室に飾ったバラに駆け寄り様子を観察した。Tのバラは枯れかけ、Sのバラは元気であった。二人は“どうして一つは枯れて一つは元気なんだろう”と考えていたようで、Sが「わかった！Tの水は多かったから枯れたんじゃない？」と言った。Tはそれを聞いて「そっか！…ムーチーの水も入れてみよう！それしたらどうなるかな？」とSに返した。Sは「(どうなるか)わからないけど実験！実験！」と声を高らかにして応え、二人で水道へ向かい、量に注意を払いながら水を入れ替えた。

一月桃の紐作りー

グループに分かれて活動が始まった時、Tのグループの一人がTへ金槌を渡そうとすると、Tは「怖いからいいよ、いいよ」と遠慮した。そして、周りの幼児がたたく様子をじーっと観察していた。T以外の幼児が交代で3回ずつたたき終えた頃、自分もやってみようと金槌を手にし、恐る恐るたたいた。たたき終わるとにこっと笑った。帰り際、迎えに来た母を水にさらした茎の近くへ呼び寄せ、「ムーチーの紐をつくったんだよ」と嬉しそうに伝えていた。

【考察⑧】

何を作るかを始めから知らせずにヒントを提示して活動に入った状況が、月桃の茎の状態をより観察するきっかけとなったと考える。「汁が出てきた！」「脱皮してる！」などの言葉や、写真で示した紐の色と月桃の茎の色を比べている姿から、幼児が茎の状態をよく観察していることがわかる。月桃の茎を紐として活用すると知った幼児は、あらためて茎に関心が生まれたのだろう、さらによく見たりほぐしたりして、植物の造りの不思議さを感じているようであった。さらにその後、幼児がよく通る出入り口付近にたらいを置いたことで、水にさらした状態の茎にも関心を示し、手で触ってその感触や匂いを味わう姿が見られた。

抽出児TとSもそれぞれのペースで紐作りを楽しんでいた。始めは金槌を怖がってたたくのを遠慮したTであったが、友だちの様子をじっくりと観察する様子から、たたきかたを見て学習していたのであろうと考える。さらに、迎えに来た保護者に嬉しそうに報告しており、Tが茎に興味・関心を抱いていることと今日の活動が楽しかったことが伺える。また、前日採ってきたバラへ積極的にかかわっている姿から、月桃探しをきっかけに身近な植物を生活へ取り入れている様子が伺える。花の様子の変化に気づき、自分たちなりに考えて行動する姿から、「物、自然」へじっくりかかわることで、新たな興味・関心が芽生えていることがわかる。

1月22日(検証場面⑨)

【環境構成】

・月桃 ・電子レンジ ・ミルミキサー ・ざる ・ボール

クラス全体 一月桃キャンドル作り①ー

月桃キャンドル作りに向けて、月桃の葉で月桃粉作りを行った。初めに手本を見せて活動の手順を説明した。月桃の葉を細かくし、レンジで熱すると葉がだんだん丸まっていく。その様子を見て「わあー！葉っぱが丸くなった！」とFが叫んだ。乾燥した葉を取り出し、それをミキサーにかけるとどうなると思うか幼児に聞かけると、「汁が出る」「細くなる」「粉になる」などの予想が出てきた。蓋をあける瞬間は一瞬静まり返り、皆私の手元に釘付けになった。開けると「細くなってる！」と声があがり、Nは「お茶の匂いがするー！」と叫んだ。

活動を始めると、レンジの前で「ムーチーの匂いがする！」「葉っぱがちっちゃくなってきた！」と話しながら葉を観察していた。Fはふるった粉を何度もざるへ戻してふるい、Hは目の大きさの異なる2種類のざるから出てきた粉を見て「こっちは細かい、こっちは大きい」と不思議そうに友だちや教師に話した。

【考察⑨】

幼稚園であまり活用することのないミキサーとレンジ、さらにはボール、ざるなどを使うと知り、道具に興味を引き付けられていた。月桃の葉は加熱すると強い匂いを発するので、レンジで温める際には匂いと葉の様子を嗅覚と視覚で感じている様子が伺えた。さらに、ミキサーにかけた後の状態を予測させたことで、ミキサーにかけられた月桃の葉により関心を抱き、それと同時に、物質の状態を変えるミキサー自体にも関心を抱いたであろうと考える。今回の実践では、月桃の葉が①「レンジ」で乾燥して丸まり、②「ミキサー」で細くなり、③「ふるい」でさらに細くなる、といった3種類の状態の変化を味わわせることができた。状態が変化するたびによく見たり、触ったり、匂いを味わっていた様子から、視覚・嗅覚・触覚を十分に働かせることのできる環境であったと捉える。

【環境構成】

・月桃の粉 ・ろうそく ・ホットプレート ・熱 ・火

【クラス全体】 一月桃キャンドル作り②-

前回の保育で作った月桃の粉を使って「月桃キャンドル」作りを行った。作り方を説明する際、教師がろうそくを折って見せると、皆息をのんで見つめていた。活動が始まり幼児がろうそくを折り始めた。その固さに驚き、戸惑う幼児、手で折れずハサミで折ろうと試みる幼児、折って匂いを嗅ぐ幼児、など様々なかかわり方が見られた。Yはハサミで切りこみを入れると折れやすいことに気づき、グループの友だちへそっと教えていた。ろうそくをホットプレートの上に載せ、加熱し始めると皆その様子をじっと見つめた。Aグループのろうそくが一番初めに溶けだした。「水が出てきた!」とLが叫び、それを聞いたB、Cグループの幼児はすかさず自分の席を離れ、一斉にAグループのプレートを囲んだ。私が「みんなのはどうなってるかな?」と問いかけると、その言葉を聞いた幼児たちは一斉に自分の席へ戻り、一層目を凝らして自分のろうそくを見つめた。全てのグループのロウが溶け出し変化が進むにつれて、「〇〇(幼児の名)のろうそくはたくさん変身してるけど△△(幼児の名)のはまだ。」「さっきは(ろうそくが)5あったのに2になってる!」などと思いついたことを口にした。ロウが完全に溶けたのを見計らい、教師がカップを取り出して幼児の前に置いた。しばらくして、じっとろうそくを見つめるLが「色が…色が…」と言った後、少しの間置いて「固まってる!」と叫んだ。さらに、ろうそくにふーっと息を吹きかけ、波打つ表面を見て目を丸くした。ロウの熱が冷めていく際は、皆その表面を不思議そうに見つめ、触って「プニプニしてる」などと教師や友だちへ話した。ロウが固まりすぎて芯が入らなくなった幼児や、こぼれて固まったロウを不思議そうに何度も触る幼児もいた。キャンドルが出来上がり、教師が一つ一つに火を灯していくと、自然と静かになり皆自分のろうそくの火を見つめた。友だちの火と自分の火を比べて「(芯が)長いのは(火が)大きくて短いのは小さいんだ」とAがつぶやいた。キャンドルに火が灯ると同時に、Bは誕生日の歌を口ずさみ始めた。1月生まれの子を祝い、みんなで歌を歌って一斉に火を吹き消した。すると「ケーキの匂いがする!」と叫ぶ声が聞こえた。幼児たちは消した後のキャンドルをじっと見つめ「先生…溶けちゃった…」「(芯が)黒くなったけどまた使える?」と不安そうに尋ねてきた。「また固まるまで待っててね。黒くなくても何回でも使えるからね」と答えると、嬉しそうにまたキャンドルを見つめた。帰りの会でキャンドル作りはどうだったか尋ねた。すると、全ての幼児が「火をつけるのが楽しかった!」「ろうそくが溶ける(固まる)のが楽しかった!」と口々に答えた。Nは、降園時、教師に「家で誕生会するときに使うんだ」と話し、キャンドルを手にもっていった。

【抽出児T, S】 一月桃キャンドル作り②-

Tは、活動が始まるとろうそくを手にするものの固くて折れず困っていたようだ。しばらくは、同じグループの友だちの様子を見ながら手で折ろうとしたりハサミで切ろうと試していたが、助けを求めて私を呼んだ。私が手本を見せた後、「ちょっと固いけど力を入れてやってみて」と声を掛けると、力で顔を歪めながらも必死に折ろうと頑張っていた。一つ目のキャンドルの材料を整え、二本目のろうそくを折る時には「涼子先生! T, もう自分でできるよ!」と大きな声で私に伝えた。ろうそくを加熱し始め、Aグループのろうそくが変化を始めた時、「Tも見せてー」と元気な声で言いながらAグループへ移動し、その様子を眺めた。自分の席へ戻ると身を乗り出して自分のろうそくを見つめ、Aグループのろうそくの状態を友だちに話しながら様子を観察していた。

Sは他の幼児の様子を見ながら自分のペースで活動を始めた。時々、教師に確認しながらも一つ一つ作業を進めていた。Aグループの変化が始まると、皆が一斉に移動する中、Sは自分の席に座っていた。皆が自分の席へ戻り始めると、そっと立ち上がりAグループの様子を見に行った。キャンドルの火を消した後は、友だちのキャンドルの様子や自分のキャンドルの様子を静かに見つめるSだった。

【考察⑩-1】 クラス全体

教師がろうそくを折る際、全員が息をのんで見つめていたことから、「ろうそくを折る」ことへ強い興味を持っていると感じた。そして、実際にろうそくの固さを感じた時の驚きや戸惑いの表情、そしてなんとかして折ろうと試行錯誤する姿からは、幼児が「ろうそく」を触覚で十分に感じている様子が伺えた。「ハサミで切りこみを入れると折れやすい」と発見した幼児は、ハサミを使ってろうそくにかかわるなかで「ろうそく」という物質を幼児なりに「概念的に意識に取り入れたのではないかと考える。また、作業をしながらろうそくの匂いを嗅ぐ幼児の姿からは、嗅覚で「ろうそく」を知ろうとする姿勢が伺えた。

加熱を始め、Aグループのロウが溶け始めた時に皆が一斉に集まったのは、ロウの状態の変化への強い関心によるものであり、その後自分のろうそくを一層目を凝らして見つめたのは、自分のろうそくへの期待と関心がさらに強くなったからだと考える。加熱過程でろうそくの「大きさ」や「数」、「変化速度の違い」などを言葉で表していたり、冷

める過程で「色」や「表面の状態」の変化に気づいていることから、幼児が視覚を働かせてろうそくにかかわっていることがわかる。また、冷めすぎて芯が入れられなくなったり、こぼれて固まったろうに触れたりした経験は、「ろうそくは溶けてもまた固まる」というろうの性質を知る経験となったであろうと考える。

火を灯した際、静かに見つめたり友だちの火の大きさと比べたりする姿から、幼児が炎を視覚で味わっている様子が伺える。また、ろうそくの炎を見て自然に誕生日の歌を口ずさんだ幼児の姿や、火を吹き消した後の煙の匂いを嗅いで「ケーキの匂いがする」といった言葉から、「視覚や嗅覚(五感)」で味わった体験が強く心に残っていることがわかる。火を消した後、ろうが溶けていることにすぐ気が付いたのは、キャンドルへの強い関心と、一連のろうの変化を体験したことでその変化を視覚で捉えることができるようになったからだと考える。

帰りの会で、幼児一人一人が口々に具体的な工程を挙げて楽しかったと話したことから、それぞれが個々の興味・関心に応じて活動を楽しみ、大いに感情・感動体験を味わったことがわかる。家で使うことを期待しながら持ち帰った幼児の姿には、じっくりとかかわったキャンドルへの愛着が感じられた。

【考察⑩-2】抽出児T, S

Tは初めて出会うろうそくの固さに戸惑いながらも、他の幼児の活動の様子を見て学習していたのだろうと捉えられる。二本目のろうそくを折る際に「もう自分でできるよ!」と大きな声で教師に伝える姿からは、一本目のろうそくとのかわりの中で「ろうそく」を知ったことと困難を乗り越えた経験によって自信がついた様子が伺えた。Aグループの状態の変化に「見せてー」と元気な声で言いながら積極的に見に行ったのは、強い興味・関心が彼を突き動かしたからだだと捉える。その後、身を乗り出して自分のろうそくを見つめ、時々他グループと比較しながら友だちと話す様子は、他グループのろうの変化によって自分のろうへの関心が強くなったと捉えられる。

Sは、静かなながらもしっかりと自分で作業を進めた。Aグループの変化が起きた時、皆と一緒に動かさずタイミングをずらして見に行った姿からは、Sがろうの変化に興味があることと、他者の動きを見ながら行動していることがわかる。また、火を消した後のろうそくを静かに見つめる姿からも、Sはしっかりと自分のペースで環境とかかわり学んでいる様子が伺える。

2月5日(検証場面⑪)

【環境の様子】

・運動遊具(サッカーボール、竹馬) ・砂場道具 ・飼育動物 ・凧揚げ

抽出児T, S -好きな遊び-

朝、私が職員室へ行くと、教師Aが「今日、TとSをサッカーに誘ったらTに『足が遅いからサッカーはいいや』と断られてしまいました。」と話してきた。それを聞いた私は“やっぱり苦手意識がある遊びには積極的にかかわろうとしないんだな”と感じた。その話を聞いた後、そら組の部屋へ行くと、Tが元気よく「涼子先生～！おはよう～！」と元気な声で挨拶をしながら抱きつくように近づいてきた。私は先ほどの教師Aから聞いた印象とは違う積極的なTの様子に少し驚いたが、自分の気持ちを素直に表現するTの姿が嬉しく、それに応えるように元気な声で挨拶を返した。Sも私の姿に気が付き、近づいてきて微笑みながら「涼子先生、おはよう。」と小さな声で挨拶をしてくれた。しばらくして二人の様子を見ると、Uを交え砂場で楽しそうにスコップで穴を掘っていた。

しばらくして砂場を覗いてみたが三人の姿が無かったので、私は園舎を一周してみた。すると、Sは飼育小屋でウサギに雑草をあげていた。Sが私の姿を見つけ「草を探したい」というので、以前月桃の葉を取りに行った小学校校庭裏に取りに行こうと誘った。Sは「行きたい！」と喜びの表情を見せた。校庭裏につくとSはいろいろな葉に興味を示した。「ね、これはなに？四つ葉かな？これは三つ葉だね。これは…二つ葉だ！」などと言いながら、茂る葉の奥に手を入れ小さな葉をよく観察していた。また、葉の下や土の中にかたつむりを発見し、「あ！かたつむりだ！」「(半分埋もれたかたつむりを見て)これは幼虫みたいだね。」などと話した。また、木の実を見つけて皮を剥くと、中の様子を見て「かぼちゃだ！」と言った。しかしすぐに「でもかぼちゃって木にできるかな？」と尋ねてきた。私が「そうだね。じゃ、ジャガイモかな？」と言うと、「でもこんなとこにジャガイモあるかな？」とSが言い、「栗かな？」と私が言うと「栗かもしれない」ということに落ち着いた。その後、たくさんの雑草を引き抜いてウサギの待つ飼育小屋へ向かった。通りがかりに小学校の飼育小屋があり、採ってきた草はそのウサギにあげることにした。Sはウサギに向かって優しい声で語りかけ、草を大事そうにあげた。私に「(隙間を指して)ここからあげよう」と提案したり、家での話を積極的に話してくれた。園に戻るとTとUがやってきて「どこにいたの？」とSに尋ねた。どうやら探していたようだ。経緯を話した後、私が「TさんとUさんは何をしていたの？」と尋ねると「(幼稚園の)ウサギにずっと草をあげていたよ。Tたちも草を探しに行ってた！」と答えた。

【考察⑩】

教師Aの話だけを聞くと、TとSが積極的に運動遊びに参加しないように捉えられるが、その後のTとSの前向きな気持ちの見られる挨拶と、その後友だちと砂場で楽しそうに遊んでいる様子から、彼らが意思を持って遊びを選んでいる姿が伺える。「サッカーがしたくない」のではなく「砂場で遊びたかった」のだろうと捉える。Sを小学校校庭裏に誘ったときに喜んで「行きたい!」と言ったのは、以前そら組で月桃を探しに行き、その後も何度か足を運んだ時に楽しさを味わい、親しみを感じているからだと考える。校庭裏に着いて、Sが積極的に葉や木の実、生き物に注意を払ったのは、以前そこで植物に十分にかかわった経験から、その場所の自然への興味・関心が芽生えていたからであろう。さらに、木の実を観察して考えたり予想したりする姿から、Sが過去の経験とつなげて思考を巡らせていることがわかる。ウサギに草をあげながらSが積極的に話しかけてくれたのは、私がゆったりと彼だけに向き合っていたからだと感じた。

記録に記した幼児の姿から、活動の中で教師が遊びを示したり、課題を設定したりすることで、「物」や「自然」への興味・関心が引き出されていると感じた。また、幼児の「物」、「自然」とかかわる時間を十分に保障することで、さらに興味・関心が高まり、積極的にかかわっていくようになったと考える。抽出児Tは、行事や友だちの姿、教師の言葉かけなどがきっかけとなり、これまで触れることが少なかった「環境」へ少しずつかかわっていくようになった。その経験の中で、心地よさや葛藤を味わいながら「環境」の魅力を知り、さらに自らかかわっていくようになったと考える。Sについては、これまでの姿を「かかわろうとしていなかった」と捉えていたのだが、そうではなく「Sなりにかかわっていた」のだということに気づかされた。検証場面⑩でSが積極的に「自然」や「動物」、「教師」へかかわっていったのは、そこに「自然」や「物」が存在していただけでなく、その環境と出会ったときに、Sのペースで感情・感動を分かち合える「教師(人)」がいたこと、さらに、Sのペースでじっくり取り組める「十分な時間」があったことが、環境として整っていたからだと考える。

最後に、検証場面⑩で、TとSが登園後すぐに砂場へ行き、その後片付けの時間までウサギに草をあげていたということは、「好きな遊びの時間」にTとSが自ら戸外へ出て、ずっと外遊びをしていたということである。また、9月に「外で遊んでもいいですか?」と言っていた二人が、検証保育後は「外に行ってきまーす!」と言って戸外へ出ていくようになったと担任から聞いた。戸外環境はTとSにとって、楽しく魅力あるものとなったようだ。

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児が自ら環境へかかわっていくようになるためには、幼児を取り巻く環境がとても重要であることに気づかされ、幼児にとってのより良き環境への理解が深まった。環境を整えるために、幼児理解を深め、適切な環境構成を行っていくことができた。また、教師の言葉かけやモデルとなる姿を示すことで、幼児の興味・関心が高まり、自ら環境へかかわるようになった。
- (2) 「幼児の学び」への理解が深まり、環境とかかわる個々の幼児の姿を見取るための、新たな視点を持つことができた。

2 今後の課題

- (1) 今回取り組んだ五感を働かせる「感覚遊び」は、特に幼児期前期に十分に行われることが望ましいとされているため、幼児の遊びの発達段階や季節を踏まえ、時期に応じた活動計画を立てる。
- (2) 幼児がより良い体験活動を行えるようにするため、素材やその活用法について教材研究を深める。
- (3) 幼児を取り巻く環境は数多くある。その一つ一つが幼児にとって意味のあるものとなるために、園の戸外・室内環境について職員間で共通理解を図り、環境を整えていく。園外の環境についても理解を深め、地域の環境を活用していく。

〈主な参考文献〉

あんず幼稚園編 2012 『きのうのつづき「環境」にかける保育の日々』 新評論
柴崎正行／若月芳浩編 2009 『保育内容「環境」』 ミネルヴァ書房
文部科学省 2008 『幼稚園教育要領』 フレーベル館